

仙台市文化財調査報告書第146集

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 XI

— 平成 2 年度発掘調査概報 —



1991. 3

仙 台 市 教 育 委 员 会

仙台市文化財調査報告書第146集

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 XI

— 平成 2 年度発掘調査概報 —



1991. 3

仙 台 市 教 育 委 员 会



第86次調査区西半全景（北より）

## 序 文

郡山遺跡の範囲確認調査も本年度は11年目を迎え、毎年数々の成果を積みあげ、東北の古代史解明に一石を投じておりますことは、古代史・考古学等の識者のみならず市民の皆様方にも御承知のことと存じます。

幻の城柵としての一端を現した昭和54年以来、継続的に進められてきた発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として私たちの前にその姿を現したのです。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した我が国最古の地方官衙跡・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな反響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度の調査ではⅠ期官衙の倉庫群や鍛冶工房の跡などが発見され、特に鍛冶工房については官衙内の工人たちの在り方を知る貴重な資料となり、不明な点の多い七世紀の官衙の実態が次第に解明されつつあります。ここに調査の記録を余すところなく報告、公開するものであります。

市街化への動きが著しい郡山地区にあって、文化財の保存につきましてもより一層緊密な調整を必要とする状況にありますが、そのような中にあって、継続的な調査を実施できますことは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様方の多くの御協力とご支援の賜物と感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産をつぎの世代に繼承していくことは、行政によってのみ成し得るものでなく、市民一人一人の先人への深い理解と子孫への広い展望なくしては成し得ないものであります。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神高揚の一助となりますことを願って止みません。

平成3年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒 英

## 例 言

1. 本書は郡山遺跡の平成2年度範囲確認調査の概報である。
2. 本調査は国庫補助事業である。
3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 木村浩二 I, II, III 1・4, VII

斎野裕彦 IV, V, VI,

前田裕志 III 2・3

遺構トレース 泉美恵子, 伊藤房江, 菅家婦美子, 小林史子, 桜井幸子

遺物実測 青山博樹, 片根義幸, 在川宏志

遺物トレース 青山, 片根, 在川

遺構写真撮影 木村, 斎野, 前田

遺物写真撮影 斎野

遺物補修復元 赤井沢千代子, 黒川光代

編集は木村・斎野・前田がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置した No. 1 原点(X=0, Y=0) とし、高さは標高値で記した。
5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列跡他壠跡	S E 井戸跡	S X その他の遺構
S B 建物跡	S I 穫穴住居跡・竪穴遺構	P ピット・小柱穴
S D 溝跡	S K 土坑	

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A 繩文土器	D 土師器(ロクロ使用)	G 平瓦・軒平瓦
B 弥生土器	E 須恵器	H その他の瓦
C 土師器(ロクロ不使用)	F 丸瓦・軒丸瓦	N 金属製品
8. 遺物実測図の中心線は、個体の残存率がほぼ50%以上は実線、ほぼ25~50%で一点鎖線、これ以下は破線とし、網スクリーン貼り込みは黒色処理を示している。
9. 本概報の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐藤: 1970) を使用した。
10. プラントオパール分析については古環境研究所に委託した。
11. 陶器・磁器の鑑定は当課佐藤洋が行なった。

## 目 次

序 文	
例 言	
I はじめに	1
II 調査計画と実績	2
III 第86次発掘調査	7
1. 調査経過	7
2. 発見遺構	8
3. 出土遺物	16
4. まとめ	22
IV 第87次発掘調査	27
1. 調査経過	27
2. 基本層序	27
3. 発見遺構・出土遺物	28
4. まとめ	35
V 第88次発掘調査	37
1. 調査経過	37
2. 基本層序	37
3. 発見遺構・出土遺物	37
4. まとめ	40
VI 第89次発掘調査	41
1. 調査経過	41
2. 基本層序	41
3. 発見遺構・出土遺物	4
4. まとめ	50
仙台市郡山遺跡第89次調査区におけるプラント・オパール分析〔古環境研究所〕	51
VII 総括	55
調査成果の普及と関連活動	60
写真図版	61

## I はじめに

平成2年度は郡山遺跡範囲確認調査第3次5ヶ年計画1年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

文化財課 課長 早坂春一

管理係 係長 鴨田義幸

主事 白幡靖子、佐藤良文、高橋三也、庄司 厚

調査係 係長 佐藤 隆

主任 木村浩二

主事 斎野裕彦

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北工業大学教授 建築史）

副委員長 T.藤雅樹（福島大学教授 考古学）

委員 岡田茂弘（国立歴史民俗博物館教授 考古学）

佐々木茂楨（宮城県多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長 考古学）

須藤 隆（東北大文学部教授 考古学）

今泉隆雄（東北大文学部助教授 歴史学）

発掘調査に際して、下記の方々諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

文化庁記念物課 主任調査官 河原純之

宮城県教育庁文化財保護課 真山 悟、岩見和泰

宮城県多賀城跡調査研究所 丹羽 茂

東北歴史資料館 加藤道男

斎藤報恩会自然史博物館 志間泰治

師崎玉県埋蔵文化財調査事業団 木戸春夫、田中広明

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々の御協力をいただいた。記して感謝したい。

地権者 赤井沢久治、斎藤助治、庄子 孝

調査参加者 前田裕志、青山博樹、赤井沢きすい、赤井沢サダ子、赤井沢千代子、安斎直子

泉美恵子、伊藤房江、大友鶴雄、尾形陽子、片根義幸、菅家婦美子、黒川光代

工藤えなよ、小林てる、小林史子、在川宏志、斎藤紀子、桜井幸子、武田知之

出中さと子、寺田ユウ子、畠中ゆかり、針生ゑなよ、福山幸子、峯岸安好

吉田アキヨ

整理参加者 前田裕志、青山博樹、赤井沢千代子、泉美恵子、伊藤房江、片根義幸

菅家婦美子、黒川光代、小林史子、在川宏志、桜井幸子、畠中ゆかり

## II 調査計画と実績

平成2年度の発掘調査は昭和60年度から開始された「郡山遺跡範囲確認調査」第2次5ヶ年計画の終了に伴い、引き続き平成2年度から平成6年度までの「第3次5ヶ年計画案」が策定され、これが郡山遺跡調査指導委員会の了解を得たことから、第3次5ヶ年計画初年次として実施した。第3次5ヶ年計画（案）は次のとおりである。

表1 第3次5ヶ年計画（案）

調査年次	調査地区	調査予定面積
平成2年度	I期官衙推定中枢地区	700m <sup>2</sup>
〃3年度	II期官衙南西部	700m <sup>2</sup>
〃4年度	II期官衙南東部	700m <sup>2</sup>
〃5年度	郡山廃寺中枢伽藍東部	700m <sup>2</sup>
〃6年度	〃〃	700m <sup>2</sup>
計	5地区	3,500m <sup>2</sup>

本年度の発掘調査については国庫補助金額の内示（総経費1500万円、国庫補助金額750万円、県費補助金額375万円）を得たことから、次のような実施計画（案）を立案した。

表2 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定期間	調査予定期間
第86次	II期官衙中央北地区	400m <sup>2</sup>	7月～9月
第87次	〃	300m <sup>2</sup>	7月～9月
第88次	〃	100m <sup>2</sup>	7月
計	3地区	800m <sup>2</sup>	7月～9月

また、この他に関連遺跡の遺構確認調査として、仙台市北部の窯跡群の調査と、仙台市西部の農村基盤総合整備事業にかかる条里遺構の発掘調査を併せて計画立案した。

計画策定後、事業の開始にあたり、緊急に調査を行う必要が生じ、最終時には第89次までの発掘調査を実施した。また、窓跡群については分布調査の結果、遺構群分布域は当該年度の開発計画区域に含まれていないことが確認されたことから、今年度は調査を行わないとした。

第86次調査は方四町II期官衙の中央北地区にて行った。昨年度実施した第83次調査北区、および昭和57年度に実施した第24次調査区に隣接している。これまでの調査結果によれば、I期官衙の遺構群が集中して発見されており、塀によって区画された官衙ブロックの様子が明らかになりつつある。この調査区内でも板塀・材木列等の存在が想定された。現況は畠地であり、60～80 cm の天地返しによる搅乱が全域にわたっていた。遺構は搅乱層直下の黄褐色粘土質シルト層上面で検出した。調査の結果、材木列・板塀等の区画施設、掘立柱建物跡、鋳造工房とみられる竪穴建物跡、溝跡、土坑、ピット等が発見され、I期官衙内部施設の在り方が次第に明らかになってきた。

第87次調査は方四町II期官衙の中央北寄りの地区にて行った。外郭北辺より 150 m 程南に位置し、昭和57年度に実施した第24次調査区に隣接している。この地区で住宅建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。これまでの調査によれば、この地区には I 期官衙の倉庫群が立ち並び、本調査区内にも倉庫建物跡の存在が想定された。現況は畠地であり、60～80 cm の天地返しによる搅乱がほぼ全域にわたっていた。遺構は耕作土下のIII層上面で検出した。調査の結果、I 期官衙段階の掘立柱建物跡、I 期もしくは I 期以前の竪穴居跡、溝跡、土坑、ピット等を発見した。

第88次調査は方四町II期官衙の中央北よりの地区にておこなった。前述した第87次調査区の東側に隣接している。この地区でアパート建築に伴う発掘届が提出されたことから、緊急調査を実施した。旧状は畠地と宅地であったが、90 cm 程の盛土がなされており、旧耕作土下の II 層上面で遺構を検出した。調査の結果、I 期官衙内部の区画施設と見られる一本柱列跡の他、土坑・ピット等を発見した。

その後、第65次調査の北側で遺構確認調査を緊急に実施する必要が生じたことから、計画を一部変更し、国庫補助金の追加（総経費200万、国庫補助金100万、県補助金額50万）が決定したことから、第89次調査を実施した。

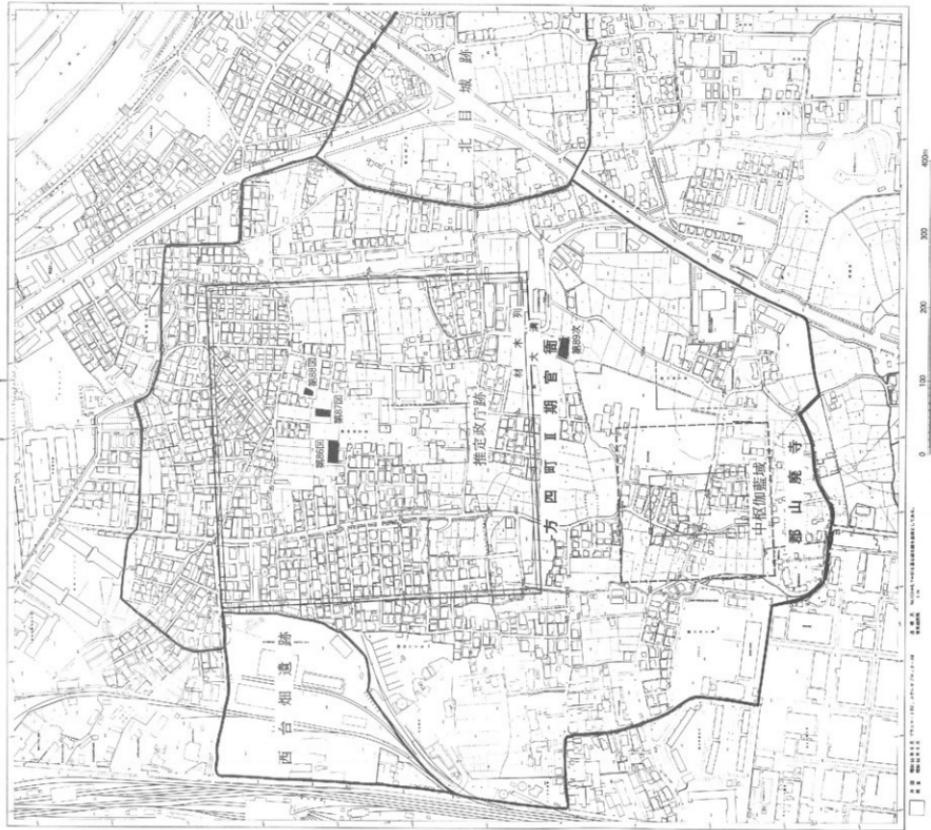
第89次調査は方四町II期官衙の外郭南辺外地区にて行った。この地区は郡山中学校校舎建設に伴って実施している第65次調査地区に隣接し、これまでの調査では官衙・寺院域外から多くの掘立柱建物跡が発見されており、本調査ではこれら遺構群の北方への広がりを確認することを目的とした。現況は水田である。調査の結果、III層上面で中世から近世の水田跡、IV層上面で溝跡、小溝状遺構群等を検出したが、官衙を構成する遺構群は発見されなかった。

表3 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第86次	II期官衙中央北地区	473 m <sup>2</sup>	7月10日～10月23日
第87次	II期官衙中央北地区	275 m <sup>2</sup>	7月10日～10月23日
第88次	II期官衙中央北地区	80 m <sup>2</sup>	7月10日～8月8日
第89次	II期官衙外郭南外地区	429 m <sup>2</sup>	10月23日～12月11日
計	4 地区	1,257 m <sup>2</sup>	7月10日～12月11日

第五圖 郡山遺跡全體圖

郡山遺跡現況平面圖



### III 第86次発掘調査

#### 1. 調査経過

第86次調査区は方四町II期官衙の中央北寄りの地区にあたり、昭和57年度に実施した第24次調査A区の南、平成元年度に実施した第83次調査北区の北西に隣接している。

これまでの周辺地区での調査により、本地区にはI期官衙の遺構群が数多く発見されており、本調査区の北側には材木列・一本柱列等の塀によって方形に区画された官衙ブロックのあることがわかっている他、東側一帯には材木列を介して倉庫群が広がっている。また、北から続く材木列と東から続く板塀が本調査区の中で交差するものと推定される。

今次調査はそのようなこれまでの調査所見に基づいて、本地区における官衙建物の配置状況の確認並びにその性格を明らかにすることを目的として実施された。現況は畠地となっており、深さ60~80cm程の天地返しによる搅乱が全域に及んでいることが、事前に実施したテストピット調査により確認されたことから、重機によって表土・耕作土の排土作業を行った。

7月10日から調査を開始した。調査区は東西30m×南北14mとし、第24次調査A区の南側に接して設定した。表土排除の結果、耕作土擾乱の下層でIII層黄褐色粘土質シルト層を検出、このIII層上面で遺構検出作業を行った。搅乱層の深さは60~80cmで、東半部が特に深い。

調査区の北側で、第24次調査との関係を確認するため13×1m、南側で、第83次調査との関係を確認するため2×2mの調査区拡張を行った。

9月6日、第65次(郡山中学校建設事前調査)・第87次と併せ、調査成果について報道関係に発表し、9月8日、一般に公開して現地で説明会を開催し、150名以上の一般市民が見学した。その後、鐵冶工房跡の土壤サンプリング・図面作成などを行い、記録の点検・追加、補足調査を実施した。10月8日より埋め戻し作業と並行してサンプリング土壤の洗浄作業を行い、10月



第2図 第86次調査区位置図

23日全ての調査を終了した。



## 2. 発見遺構

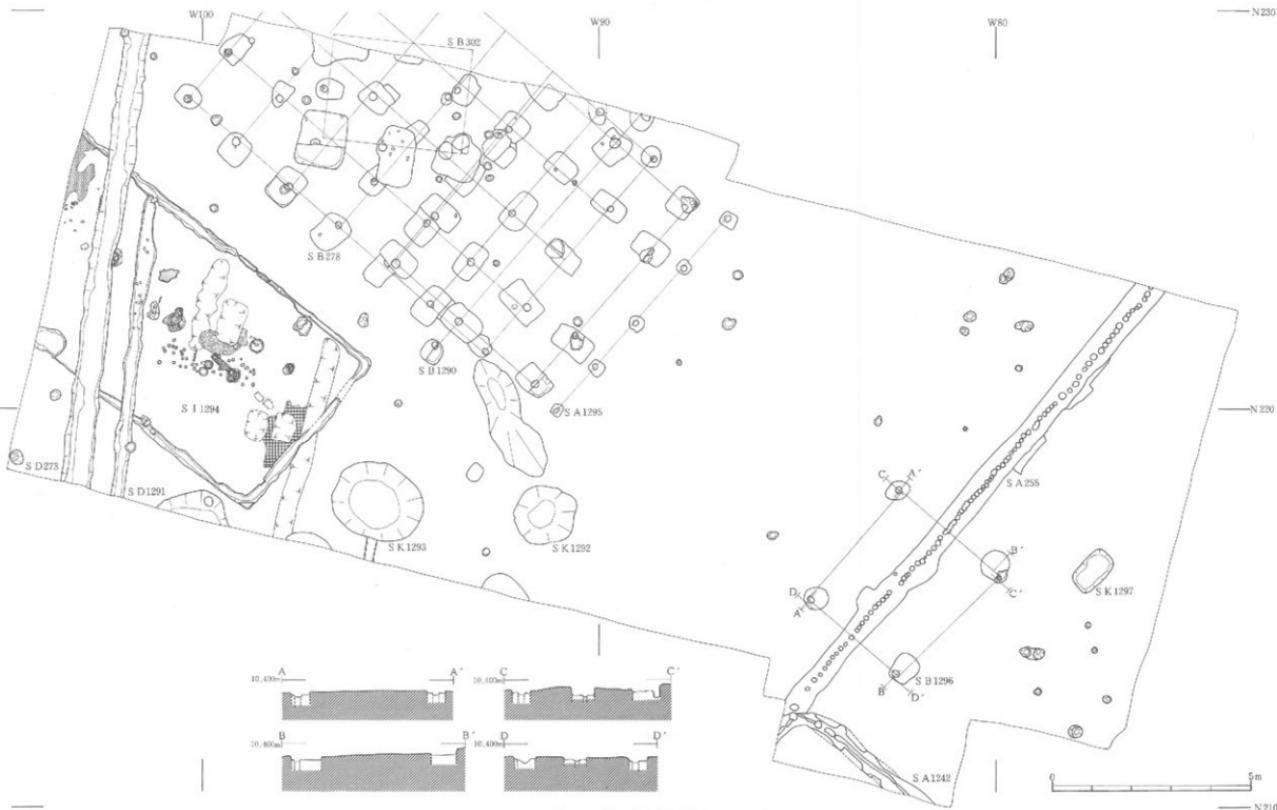
今回の調査で発見された遺構は、一本柱列2条、材木列1条、板塀跡1条、掘立柱建物跡4棟、竪穴建物跡1軒、溝跡2条、土坑3基、小柱穴・ピット43などである。これらの遺構は耕作土下層の黄褐色粘土質シルト(IV層)上面で検出したものであるが、本来はこの上層で検出される遺構である。しかし、耕作による搅乱のためIV層上層はほとんど残っていない。これらの遺構を大別すれば重複関係や基準方向の違いにより3つの階段に分けられ、これまでの段階区分の第3段階(I期官衙)、第4段階(II期官衙・寺院)、第5段階(平安以降)に相当する(註1)。特に第3段階のI期官衙の遺構が主体をしめる。

**SA255 材木列** 南北に延びる材木列で、調査区の北、南へと更に續く、方向はN-35°-Sである。長さ14.4m、上幅50~65cmで布堀りのほぼ中央に直径8~12cmの柱痕跡が見られる。埋土は褐色・黒褐色・暗褐色シルトで須恵器片、土師器片が出土している。24次調査及び61次調査で検出されたSA800からの総長は93mである。SA1242に切られている。

**SA1242 板塀跡** 東西方向に延びる板塀であるが、SA255とぶつかるところで南に直角に曲がりさらに南に延びる。方向は東西方向がE-33°-S、南北方向がN-33°-Eである。長さは東西方向に3.5m、南北方向に0.9m、上幅22~73cmで布堀りのほぼ中央に幅6~8cmの板痕跡が見られる。77次調査(昭和63年度)において検出されたSA1204、SA1212、SA1220が東西ラインで同一直線上に並んでおり、このことからこの板塀の総長は東西方向に119mであるとみられる。土師器片が出土している。

**SA1245 一本柱列** 東西方向に延びる一本柱列で、調査区の南東に更に續く。柱穴は2.4m以上×0.7m以上の隅丸長方形である。SA1242と同位置にあり、これに切られている。83次調査での検出分も含め総長35.8m以上である。

**SA1295 一本柱列** 南北方向に延びる一本柱列で、方向はN-32°-Eである。柱間は南北4間



第4図 第86次調査区全体図

で総長は 6.5 m である。柱間寸法は 150~180 cm、柱穴は一辺 30~45 cm の隅丸正方形で柱痕跡は直径 12~14 cm である。

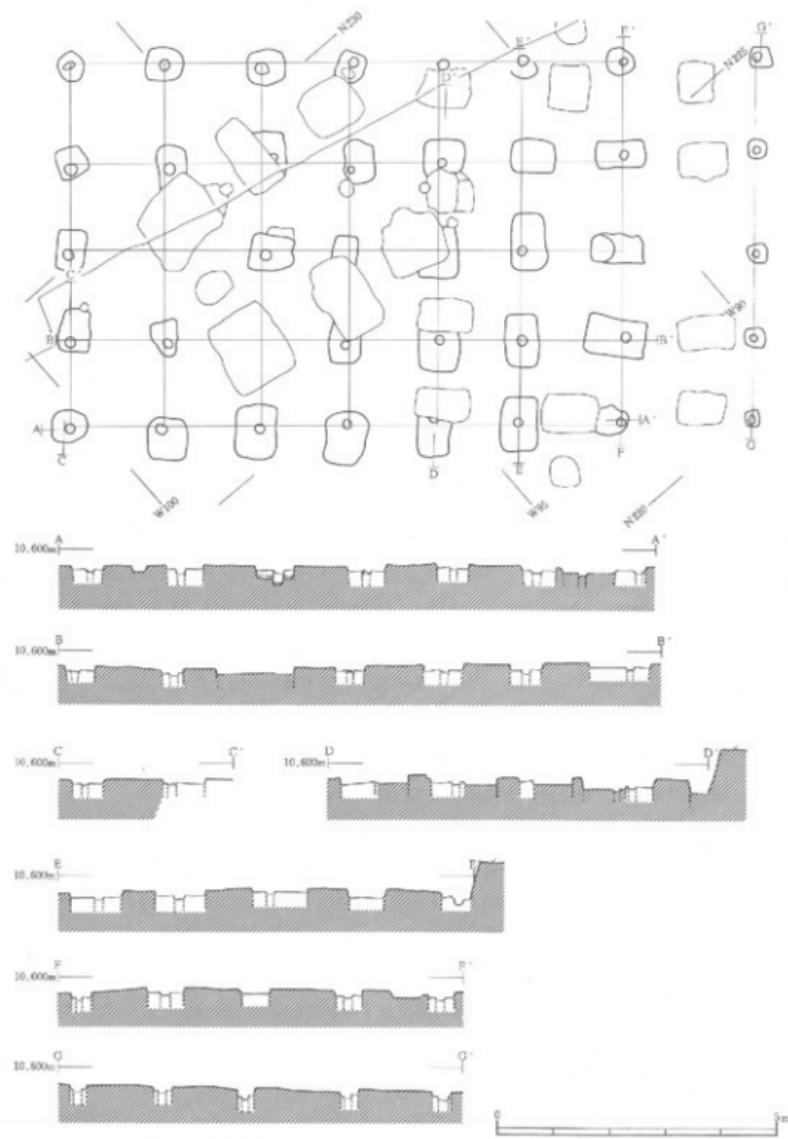
**SB278 建物跡** 24次調査(昭和57年度)で検出された建物跡の南側部分である。24次調査の成果を併せれば、東西 6 間、総長 9.9 m(柱間寸法 150~180 cm、平均 165 cm)、南北 4 間、総長 6.6 m(柱間寸法 150~180 cm、平均 165 cm)の東西棟の純柱建物跡で、東西柱列の方向は E-33°-S である。柱穴は 50~70 cm × 50~100 cm の隅丸長方形で、柱痕跡は直径が 18~20 cm である。南 1 東 5 柱穴では深さは 50 cm で埋土は暗褐色・灰黄褐色・にぶい黄褐色・褐色シルトで土師器片・須恵器片・鉄滓が出土している。

**SB302 建物跡** 24次調査で検出された建物の南側部分である。24次調査の成果を併せれば、東西 2 間、総長 3.8 m(柱間寸法 150~190 cm、平均 170 cm)、南北 1 間、総長 2.7 m(柱間寸法 2.7~2.8 m、平均 2.75 m)の東西棟の建物跡で、東西の方向は E-0°-W である。柱穴は 68~130 cm × 92~140 cm の隅丸長方形で、柱痕跡の直径が約 20 cm である。南 1 西 1 柱穴では深さは 58 cm で埋土は褐色・暗褐色・黄褐色粘土質シルトで土師器片が出土している。

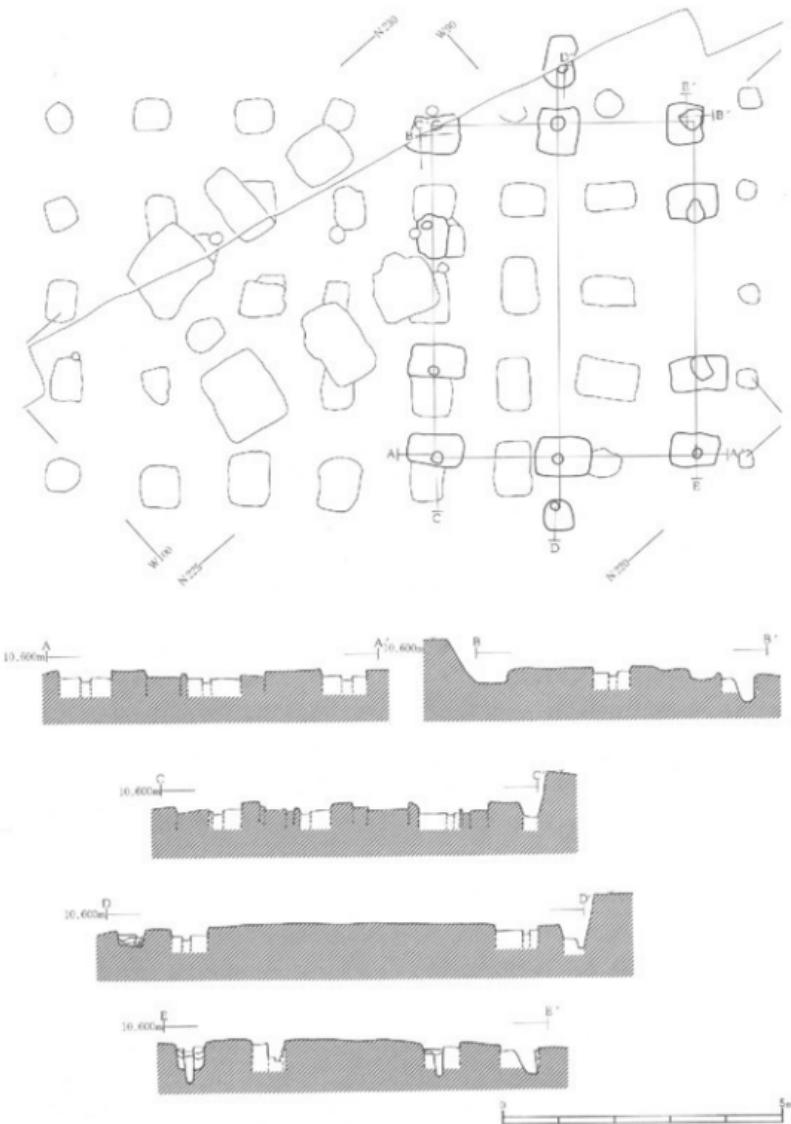
**SB1290 建物跡** 南北 3 間、総長 6 m(1・3 間目の柱間寸法 150~170 cm、2 間目の柱間寸法 260~300 cm)、東西 2 間(柱間寸法 230~240 cm、平均 235 cm)の南北棟の建物跡で、棟持柱を持つ。南北の方向は N-33°-E である。柱穴は側柱が 56~70 cm × 80~100 cm の隅丸長方形で、柱痕跡の直径は 18~26 cm である。棟持柱の柱穴は 52~54 cm × 60~94 cm の隅丸長方形で、柱痕跡の直径は 20 cm である。南 1 東 1 柱穴では深さは 70 cm で、埋土は暗褐色・褐色粘土質シルト・暗褐色・褐色・黄褐色シルトで土師器片・須恵器片が出土している。

**SB1296 建物跡** 南北 1 間、柱間寸法及び総長 3.6 m、東西 1 間、柱間寸法及び総長 3.4 m の南北棟で SA255 をまたいで建てられた構造建物跡である。柱穴は 52~62 cm × 54~72 cm の円形または隅丸長方形で、柱痕跡の直径は 15~18 cm である。

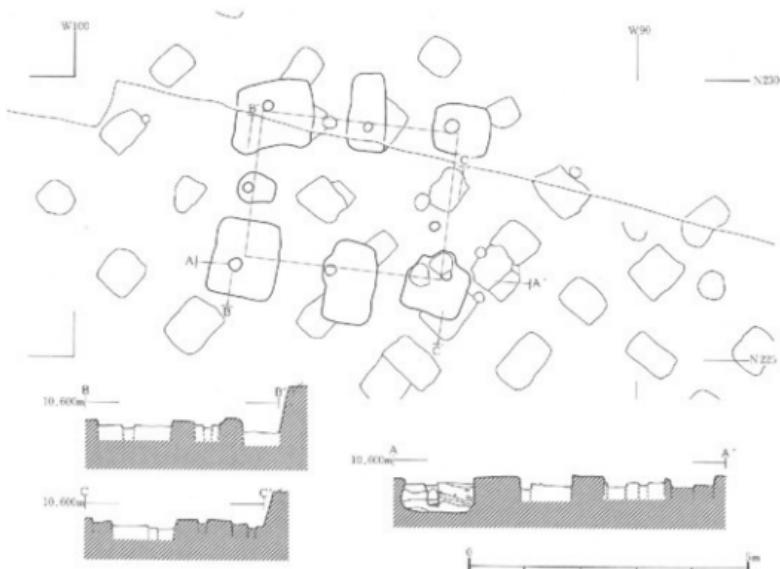
**SI1294 穹穴建物跡** 東西 9.4 m 以上、南北 4.8 m の東西に長い長方形の鍛冶工房跡で東西軸方向は E-33°-S である。壁際には上幅 10~30 cm、深さ 17~19 cm の周溝がみられる。床面までの深さ 16 cm 以上で、堆積土は暗褐色・黒褐色・褐色・黄褐色シルトで多量の鉄滓が付着した土師器甕を含む土師器片・須恵器片・鉄製品・鉄滓・フイゴ羽口が出土している。東西南向に並んで建物のほぼ中央に鍛冶炉が 5 基検出されており、その周辺で多量の鉄滓やフイゴの羽口・鉄製品などが出土している。鍛冶炉の形態は 1 号炉は長軸 25 cm 短軸 18 cm の楕円形、深さは 10 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。炉の内部より土師器片が出土している。また炉の南側 90 cm のところに 25 × 15 cm の石が 2 個施設されており、その配置から鍛冶炉に関連したものとみられる。2 号炉は長軸は 32 cm、短軸は 25 cm の楕円形、深さは 8 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。炉の内部より土器片・鉄滓・



第5図 第86次調査区 S B278建物跡・S A1295一本柱列跡平面図



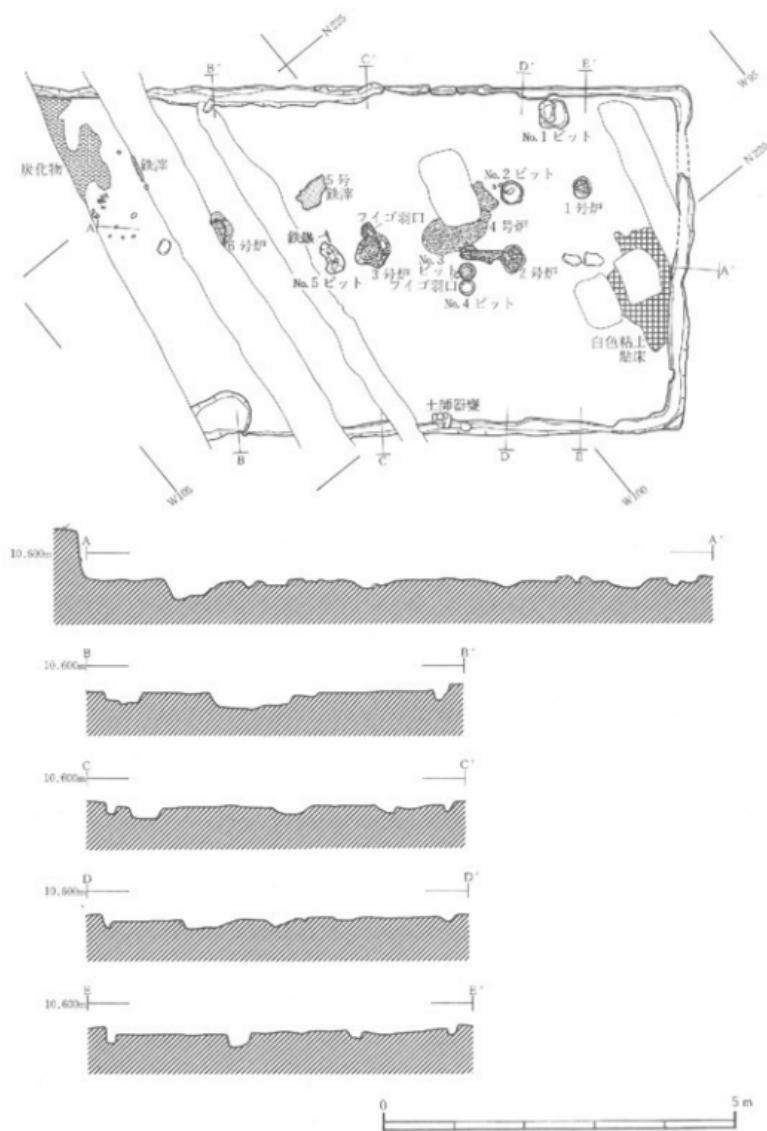
第6図 第86次調査区S B1290建物跡平断面図



第7図 第86次調査区 S B302建物跡平面面図

楕円形炉が出土している。炉から西に小溝状の落込みが統いており、フイゴの通風施設と思われる。またその南に隣接して直径 25 cm のピット (No. 3 ピット) が検出され、全体が熱で還元されている。3号炉は長軸 50 cm、短軸 40 cm の不整円形、深さは 10 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。炉内部より土師器片・鉄製品・鉄滓が出土している。フイゴの送風施設と思われる小溝状の落込みが北に約 15 cm 残存しており、鉄滓の付着した羽口が出土している。炉の西に長軸 45 cm、短軸 23 cm の椭円形のピット (No. 5 ピット) が検出され、鉄滓・鉄製品が出土している。また炉の北 2 m のところで鉄滓が集中して出土している。4号炉は攪乱が著しいためその形状は不明であるが、還元及び酸化された面が確認される。また炉の西に直径 32 cm のピット (No. 2 ピット) が検出され、周辺が熱で酸化されている。6号炉は SD273 に切られ、直径 36 cm の半円状に残存する。深さは 17 cm で壁面は還元されており、その周辺は酸化されている。SD273・SD1291 に切られている。

**SD273 溝跡** 24次調査で検出された溝跡の南側部分である。24次調査の成果を併せれば、総長 32 m 以上で南北に延びる溝跡である。上幅 60~74 cm、下幅 24~54 cm、深さ 28~32 cm、底面は多少凹凸があり、断面形は逆台形、壁は角度をもって直に立ち上がる。方向は N-1°-E である。堆積土は黒褐色シルト、黄褐色シルト、明黄褐色シルトであり、堆積土中から土師器片



第8図 第86次調査区 S I 1294銅冶工房跡断面図

が出土している。SI1294 を切っている。

**SD1291 溝跡** 総長 7.5 m 以上の南北に延びる溝跡である。上幅 30~50 cm、下幅 12~42 cm、深さ 10~14 cm、底面は多少凹凸があり、断面形は偏平 U 字形、縁はゆるやかに立ち上がる。方向は N-0°-E である。堆積土は暗褐色シルト、黄褐色シルトであり、堆積土中から土師器片が出土している。SI1294 を切っている。

**SK1292 土坑** 直径 150 cm の円形で、深さ 18 cm、底面は多少凹凸があり、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルト、灰黃褐色シルト、褐色シルトで、堆積土中から土師器片が出土している。

**SK1293 土坑** 短軸 190 cm、長軸 225 cm の円形で、深さ 26 cm、底面は多少凹凸があり、壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は暗褐色シルト、黒褐色シルト、黄褐色シルトで、堆積土中からは多量の土師器片が出土している。

**SK1297 土坑** 67×113 cm の隅丸長方形で、深さ 28 cm、底面は平坦で壁は角度をもって立ち上がる。堆積土は黒褐色シルト、暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトで堆積土中から土師器片が出土している。

### 3. 出 土 遺 物

第86次調査による出土遺物は、土師器・須恵器・陶器・磁器・鉄製品・鉄滓・小玉石などである。今回の調査区内での遺物出土量は比較的少なく、破片が大部分であったため復元できるものはわずかである。以下、遺構ごとに略述する。

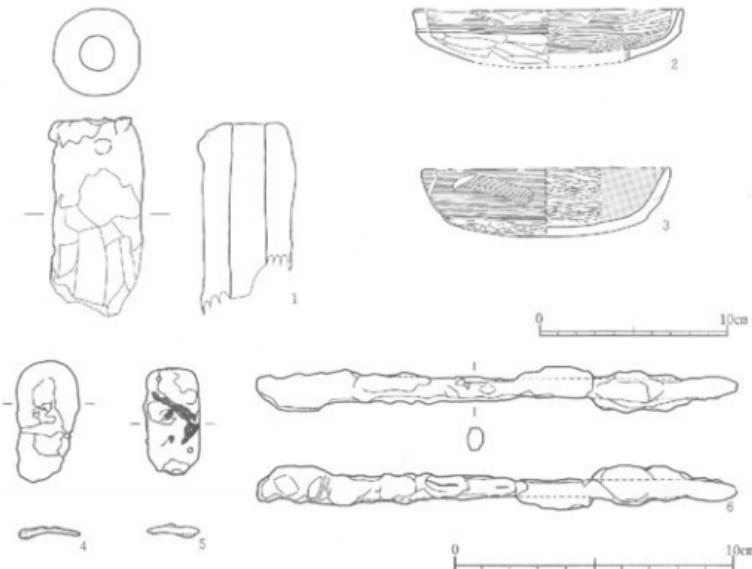
**SA255 材木列** 掘り方埋土から土師器 C-658 を含む土師器坏片・甕片、須恵器坏片が出土している。

**SA1242 板塀跡** 掘り方埋土から土師器 C-653 坏片を含む土師器片が出土している。

**SB278 建物跡** 北 2 東 1 柱穴の埋土から土師器片、北 2 東 2 柱穴から土師器 C-657 を含む土師器坏片・土師器甕片、北 2 東 3 柱穴から土師器片、北 3 東 1 柱穴から土師器片、南 1 東 2 柱穴から土師器 C-654・C-655 坏片、南 1 東 3 柱穴から土師器片、南 1 東 4 柱穴から土師器片、南 2 東 1 柱穴から土師器片、須恵器甕片、南 2 東 2 柱穴から土師器片、南 1 西 3 柱穴から土師器片、南 2 西 5 柱穴から土師器 C-664 坏片が出土している。

**SB302 建物跡** 南 1 西 1 柱穴の埋土から土師器 C-662 坏片を含む土師器片、南 1 西 2 柱穴から土師器片が出土している。

**SB1290 建物跡** 北 1 東 2 柱穴の埋土から土師器片、北 2 西 1 柱穴から土師器片、南 1 東 1 柱穴から土師器坏片・甕片・土師器片、須恵器片、南 1 東 2 柱穴から土師器 C-660・C-661 坏片を含む土師器片・土師器甕片、須恵器甕が出土している。南 2 東 1 柱穴の埋土から土師器 C-665

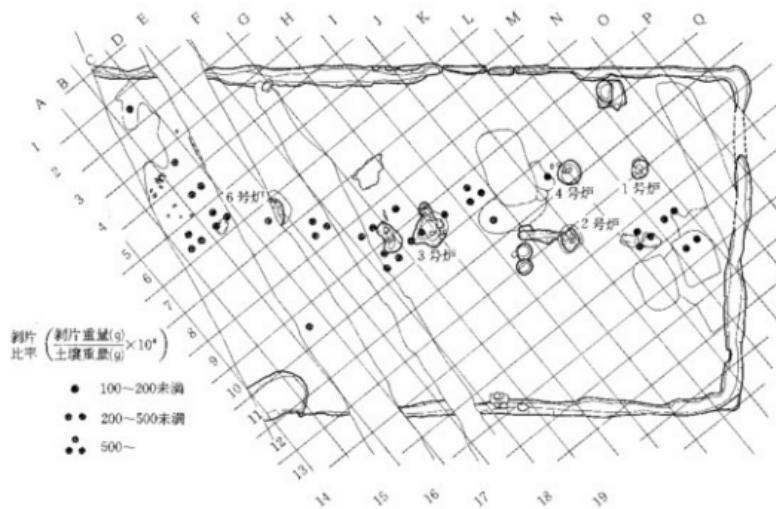
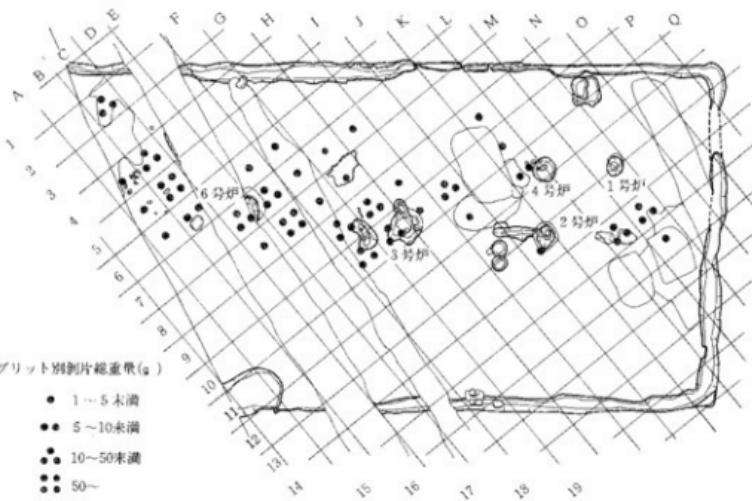


番号	登録番号	種別	基部	出土遺跡	裏面	外観測定			内観測定			法線			現存	措考	写真図版
						横幅	高さ	厚さ	横幅	高さ	厚さ	横幅	高さ	厚さ			
1	P-19	土器品	羽口	SI1294	口縁付	ケズリ	不		口縁付	脚部	裏側	0.8	1.2	0.2		鐵附着	54-3
2	C-665	土器品	环	SI1290	ハラミガタヘラミガタ	ハラミガタ	ハラミガタ	3.3	14.2								
3	C-666	土器品	环	発見	ヨコナデ	ヨコナデ	ハラケズリ	ハラミガタ→褐色地	3.6	15.2							54-1
番号	登録番号	種別	基部	出土遺跡	裏面	外観測定			内観測定			法線			現存		
4	N-44	鉄製品	羽口	SI1294	全	横幅	高さ	厚さ	横幅	高さ	厚さ	横幅	高さ	厚さ			写真図版
5	N-45	鉄製品	羽口	SI1294	4.3	2.2	0.15	0.2									54-2
6	N-47	鉄製品	羽口	SI1294	床面	横幅	高さ	厚さ	横幅	高さ	厚さ	横幅	高さ	厚さ			写真図版

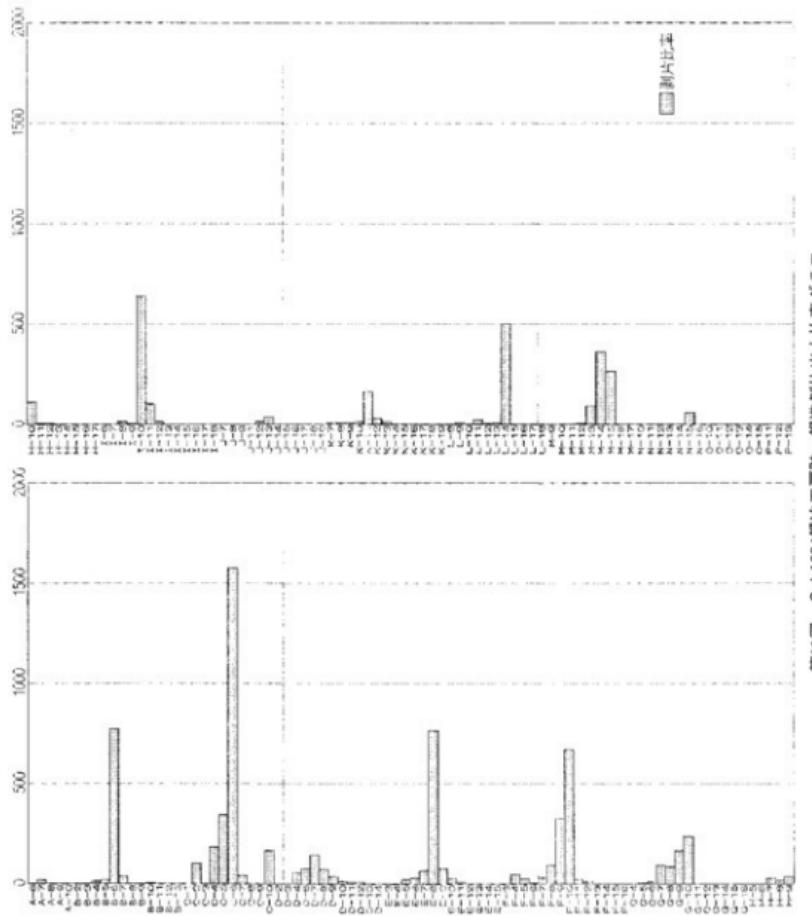
第9図 第86次調査区出土遺物実測図

坏（第9図2）を含む土師器片・甕片、須恵器甕片、柱抜取り穴から土師器片・須恵器甕片、南1西1柱穴から土師器片、南2西1柱穴から土師器片、北棟持柱穴から土師器片、南棟持柱穴から土師器C-666 坏片を含む土師器片が出土している。

SI1294 穫穴建物跡 検出面から土師器片、鉄製品 N-45(種別不明)、鉄滓、埋土中から鉄滓が多量に付着した土師器 C-663 甕・C-668 坏を含む土師器片、種別不明の鉄製品、多量の鉄滓、鍛造剝片が出土している。床面から土師器片、須恵器片、先端部鉄滓付着の羽口 P-20 を含むフイゴ羽口片、鉄製品 N-44 (種別不明)・N-49 鉄錠（第9図6）を含む鉄製品、椀形甕、多量の鉄滓が、1号炉から土師器片、2号炉から土師器片、椀形甕を含む鉄滓が、3号



第10図 第86次調査区 S-1294鍛冶工房跡鍛造削片出土分布図



第11図 S 1129-1176銅冶房跡 總造銅片出土比率グラフ

$\frac{N}{(t)} \times b$	土壤类型(a)	制片率(%)	剖面总厚(米)	颗粒分选量(%)	$\geq 7$	$\geq 7$	$\geq 7$	制片率(%)	土壤厚度(米)	制片率(%)	制片率(%)
A-6	1.40	0.05	15.455	*	D	E-6	9.160	3.15	34.389	0.05	D
A-7	257	0.05	0.00	*	D	E-7	13.565	9.90	70.770	0.1	D
A-8	400	0.00	0.00	*	D	E-8	7.585	57.80	767.687	0.8	A
A-9	840	0.00	0.00	*	D	E-9	860	0.70	81.395	*	D
A-10	660	*	*	*	D	E-10	825	0.75	26.393	*	D
B-2	5.115	0.10	1.965	*	D	E-11	385	0.65	12.697	*	D
B-3	8.160	0.35	4.289	*	D	E-12	190	*	*	*	D
B-4	15.460	0.25	14.554	*	D	E-13	105	*	*	*	D
B-5	15.660	3.30	21.298	0.05	D	E-14	405	*	*	*	D
B-6	253	4.80	74.194	*	D	E-15	265	*	*	*	D
B-7	510	0.20	37.977	*	D	E-16	50	*	*	*	D
B-8	450	0.00	0.00	*	D	E-17	1.400	0.70	50.000	*	D
B-9	660	0.00	0.00	*	D	E-18	825	0.75	30.303	*	D
B-10	565	0.05	8.850	*	D	E-19	15.070	1.50	9.394	*	D
B-11	770	*	*	*	D	E-20	11.165	3.75	33.567	0.05	D
B-12	750	*	*	*	D	E-21	1.340	1.30	97.015	*	D
B-13	60	0.05	1.166	*	D	E-22	9.140	17.90	38.729	0.65	H
C-1	4.290	0.05	1.166	*	D	E-23	3.375	22.70	61.593	0.5	A
C-2	12.275	13.10	106.721	0.05	C	E-24	410	0.10	24.380	*	D
C-3	12.150	*	3.704	*	C	E-25	400	0.05	12.500	*	D
C-4	11.140	20.650	184.022	0.4	C	E-26	620	*	*	*	D
C-5	20.690	71.00	184.660	1.1	B	E-27	870	*	*	*	D
C-6	585	9.25	1.581.197	0.05	A	E-28	700	*	*	*	D
C-7	340	0.15	41.118	*	D	E-29	160	*	*	*	D
C-8	250	*	*	*	D	E-30	90	*	*	*	D
C-9	110	0.05	1.66.667	*	D	E-31	2.470	0.15	6.073	*	D
C-10	30	0.15	2.757	*	C	E-32	1.250	0.15	12.000	*	D
D-2	5.440	0.15	1.971	*	D	E-33	1.270	1.25	98.495	*	D
D-3	1.510	0.05	3.311	*	D	E-34	2.965	2.55	87.780	*	D
D-4	1.380	0.80	57.971	*	D	E-35	6.650	11.05	166.165	0.6	C
D-6	375	0.30	80.000	*	D	E-36	12.420	29.65	238.728	2.7	D
D-7	7.000	10.20	145.299	0.7	C	E-37	0	0.00	0.000	*	D
D-8	3.985	2.05	74.028	0.05	D	E-38	1.360	0.65	3.968	*	D
D-9	1.180	0.45	38.136	*	D	E-39	1.050	*	*	*	D
D-10	340	0.15	17.857	*	D	E-40	1.063	*	*	*	D
D-11	960	0.10	10.417	*	D	E-41	520	*	*	*	D
D-12	360	0.05	13.889	*	D	E-42	970	*	*	*	D
D-13	265	*	*	*	D	E-43	14.5	*	*	*	D
D-14	500	*	*	*	D	E-44	360	0.05	28.393	*	D
E-3	623	*	*	*	D	E-45	1.265	0.05	28.329	*	D
E-4	1.065	0.10	5.089	*	D	E-46	530	1.00	23.504	*	D
E-5	2.039	0.55	27.228	*	D	E-47	2.340	0.55	41.152	0.05	D

表4 第86次調查区S1294鐵冶工房跡出土陶製片計量表(1)

ゾーン	土壌量(kg)	砂質量(g)	細粒比%	粒径(粒度)	粒径(重量%)	ランク	ダリヤト	上層地盤(m)	剥離比率	軽松地盤率(%)	ランク	
H-10	2,710	—	3.45	116,286	0.35	C	K-16	1,4530	0.05	—	D	
H-11	710	—	0.45	7,042	—	D	K-17	1,820	—	2.747	D	
H-12	3,905	—	0.25	6,402	—	D	K-18	2,480	—	—	D	
H-13	1,340	—	0.65	3,731	—	D	K-19	780	—	—	D	
H-14	929	—	0.65	5,435	—	D	L-8	110	—	—	D	
H-15	1,260	—	—	—	—	D	L-9	—	—	—	D	
H-16	2,050	—	—	—	—	D	L-10	—	—	—	D	
H-17	500	—	—	—	—	D	L-11	—	—	—	D	
I-6	615	—	—	—	—	D	L-12	765	0.45	25.210	—	
I-7	1,660	—	0.05	—	3,012	—	D	L-13	—	—	—	
I-8	1,115	—	0.20	17,467	—	D	L-14	5,770	—	500.967	1.4	
I-9	1,520	—	0.15	9,848	0.05	D	L-15	—	—	—	D	
I-10	6,950	—	44.60	641,727	1.05	A	M-15	—	—	0.003	D	
I-11	2,360	—	2.50	345,932	0.1	C	L-17	—	—	—	D	
I-12	2,255	—	0.40	—	17,758	*	D	L-18	2,610	—	—	D
I-13	2,490	—	0.65	—	2,038	—	D	M-9	—	—	—	
I-14	170	—	*	—	*	D	M-10	—	—	0.003	D	
I-15	750	—	*	—	*	D	M-11	990	—	—	D	
I-16	925	—	*	—	*	D	M-12	510	0.05	9,804	—	
I-17	1,240	—	*	—	*	D	M-13	975	—	—	D	
I-18	1,400	—	*	—	*	D	M-14	7,745	—	—	B	
J-7	3,460	—	*	—	*	D	M-15	—	—	365,397	1.75	
J-8	3,715	—	0.05	—	3,366	—	D	M-16	—	—	—	
J-9	5,560	—	0.20	—	3,597	—	D	M-17	325	—	—	D
J-10	2,000	—	0.40	—	15,444	*	D	N-10	—	—	—	
J-12	2,530	—	—	—	—	D	N-11	380	—	—	D	
J-13	3,080	—	1.20	39,216	0.05	D	N-12	—	—	—	D	
J-14	520	—	*	—	*	D	N-13	—	—	—	D	
J-15	70	—	*	—	*	D	N-14	—	—	—	D	
J-16	1,700	—	*	—	*	D	N-15	—	—	—	D	
J-17	2,720	—	*	—	*	D	N-16	—	—	—	D	
J-18	580	—	*	—	*	D	O-10	—	—	—	D	
J-19	350	—	*	—	*	D	O-11	250	—	—	D	
K-7	410	—	0.65	12,195	*	D	O-12	65	—	—	D	
K-8	2,890	—	0.40	13,841	*	D	O-13	130	—	—	D	
K-9	9,590	—	1.00	10,428	*	D	O-14	255	—	—	D	
K-10	7,535	—	1.10	14,500	*	D	O-15	39	—	—	D	
K-11	4,985	—	7.45	162,133	0.8	C	P-11	—	—	0.000	D	
K-12	455	—	0.15	32,987	*	D	P-12	265	—	0.000	D	
K-13	2,870	—	0.45	16,814	0.15	D	P-13	65	—	0.000	D	
K-14	1,675	—	0.10	5,970	*	D	絶	382,137	432,70	116,344	D	
K-15	190	—	*	—	*	D	—	—	—	—	D	

表5 第86次調査区 S-124鋼治工房跡出土鉄造刷片計量表(2)

炉から土師器片、P-19（第9図1）を含む羽口片、鉄製品、少量の鉄滓が、5号炉から土師器片が、6号炉から鉄製品、鉄滓が、出土している。鉄製品N-44は全長3.8cm、最大幅1.8cm厚さ0.3cmの長方形で対角線上に2ヶ所直径2mmの孔が穿たれている。N-45は全長4.3cm、最大幅2.2cm、厚さ0.15~0.2cmで鏽化が著しく、一部欠損し孔の有無は確認できないがN-44と同種のものと思われる。N-49鉄鎌は全長17.1cm以上、最大幅は1.35cm、厚さ0.55cmで鏽化が著しく、その形態は不明である。また床面上より多量の鍛造剝片と粒状滓が出土しており、50cm×50cmのグリットごとに採取し、その分布状態は別表にまとめて表記した。

SK1292 土坑 土師器片が出土している。

SK1293 土坑 土師器C-659 壺を含む土師器片が出土している。

SD1291 溝跡 土師器片が出土している。

その他ピットNo.1から須恵器片が出土している。

擾乱層からは土師器C-652、外面口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ調整、内面ヘラミガキ調整、内外面黒色処理の土師器C-656壺（第9図3）を含む土師器片、P-18土鉢、陶磁器片、両頭金具N-46~48・種別不明鉄製品、鉄滓、K-23・24小玉石が出土している。

#### 4.まとめ

発見された遺構は一本柱列1条、材木列1条、板塀跡1条、掘立柱建物跡4棟、竪穴建物跡1軒、溝跡2条、土坑3基、小柱穴・ピット43である。これらの遺構は重複関係・方向等から一部不明なものを除けば3つの段階に区分され、これまでの段階区分の第3段階、第4段階、第5段階に相当するものと考えられた。

〔第3段階〕 SA255材木列、1242板塀跡、I295一本柱列、SB278・1290・1296建物跡・SI1294竪穴建物跡、I期官衙段階

塀跡・建物跡は1棟を除き全て本段階に属する。重複関係から2回の変遷が認められるが配置状況から3期にわたる可能性もある。重複関係は次の通りである。



SB278は6間×4間の総柱建物であるが、本調査区の東南部に展開する倉庫建物群に見られる総柱建物と比較して、柱間数が多いことや柱直径が小さいことなどの相異が認められる。倉庫建物としての機能が考えられるが、大形の柱を使用した倉庫とは異なった機能を持つ倉庫と考えておきたい。この様な小形の柱を使用した総柱建物については、関連する建物等とあわせ、

その機能については今後検討を要する。SA1295は4間分総長6.5mの一本柱列による塀である。SB278の東妻から2.4m程離れ、建物梁長と合わせて造られたものとみられ、SB278の東側目隠塀と考えられる。

SB1290は棟持柱を有する3間×2間の小規模な建物である。東桁柱列の中間柱間が両脇柱間の2倍程あり、東側を正面入り口とした建物と考えられる。棟持柱を有する建物はこれまで本遺跡の調査では類例がなく、東北地方の他の城柵官衙遺跡でも発見例がないことから、通常の官衙建物とはみなし難い。建物方向は東西柱列がN 33°Eを示し、柱穴埋土からも7世紀代のものとみられる土師器片が出土していることから、第3段階に属するⅠ期官衙期の建物とみられる。このような建物は神社建築の社殿などに類例が求められ、古式神殿の中でも桁行3間、梁行2間、棟持柱を持つ掘立構造のものは伊勢神宮正殿を代表とする「神明造」(註2)とよばれるものである。SB1290を様式・規模だけで神殿とは判定し難いが、官衙内に置かれる社や神殿等の神事に関わる施設の実態究明とあわせ、今後さらに検討してゆきたい。

SB1296は1間×1間のほぼ方形の建物で、ほぼ中央をSA255材木列が通っている。建物と材木塀との取り付き状況は不明であるが、塀は建物内部においても変化なく、構造的には塀をまたぐ、床の高い柵状の建物かと考えられよう。SA255材木列は総長93m以上にわたって延びており、北延長は不明であるが、南はSA1242板塀と直角に接続する部分から南はSA1242に切られており、ある段階にはこの接続部分が南の端とみられるが、同一延長線上にSA1242板塀が造られていることから区画施設・遮蔽施設としての塀は、その後も南側に機能していたものと見られる。また、このSA1242板塀と同位置でSA1245一本柱列が先行してみられるがこのSA1245とSA255との新旧関係・接続状況は明らかにできなかった。

SI1294竪穴建物は、幅にくらべ、長軸が9.4m以上となる長屋風の竪穴建物で、これまで発見されてきた竪穴建物同様、主柱穴がみられない。竪穴中央にはほぼ長軸方向に並ぶように5期の炉が造られている。床面からは鉄製品、フイゴ羽口、鉄滓の他、鍛冶精錬の際に飛散する鍛造剝片や粒状滓が多く量に発見されたことから、5基の炉は鍛冶炉であり、この竪穴建物跡が鍛冶工房跡であったことが判明した。年代を推定する土器類は殆どないが、方向性からみてⅠ期官衙段階のものとみて大過なかろう。このSI1294の北西9m程の地点には第6次調査(註3)でSI50竪穴住居跡の一部を検出しており、床面上の焼土、炭火物散布状況や、両竪穴の南北が、揃っていることから、同様の長屋風工房が建ち並んでいたことも想定される。SA255・356の塀により区画されたこの一画はⅠ期官衙段階に官衙内に造られた工房施設ブロックであった可能性が高い。

鍛造剝片のサンプリングについては次のようにして実施した。

竪穴造構内に、測量基準線にあわせ50cmメッシュを設定し、南北方向は北から南に1~19、

東西方向は西から東に A～Q まで付し、グリッド名とした。床面直上堆積土の除法により、床面検出作業に入った段階で、鉄滓、鍛造剝片が観察されたことから、床面上にわずかに残った堆積土をグリッド毎に全てサンプリングした。各グリッドは同一レベルでサンプリングを行ったが、遺構周縁部や攪乱穴・炉本体が含まれるグリッドは他にくらべ、サンプリング面積に差があり、サンプリング土壤重量にもかなりの差が生じた。これを補正するため描出した鍛造剝片量の表記には実質的な絶対重量の他に、土壤重量に対する剝片重量の割合を10倍して剝片比率として表記した（第10・11図）。その結果、出土量・出土比率とも遺構内での在り方は一律ではなく、局在化傾向が看取される。すなわち鍛造剝片は炉の周辺から、工房内でも北側に多く、南半には殆どない。実際の鍛造作業を行う作業空間は工房内の北側にあったことが、この傾向から推定されよう。全ての炉が同期に使用されていたか否かは明らかにできなかったが、工房の規模からみても単一一人の工房とは考え難く、複数の組織化された工人集団による官営の工房跡とみておきたい。官衙内での鍛冶精錬の行われた規模や工人集団の実態も不明であるが、今後この周辺地区の調査を進めていく上で、課題として検討してゆきたい。

#### 〔第4段階〕 SB302 建物跡、SD1291 溝跡 II期官衙段階

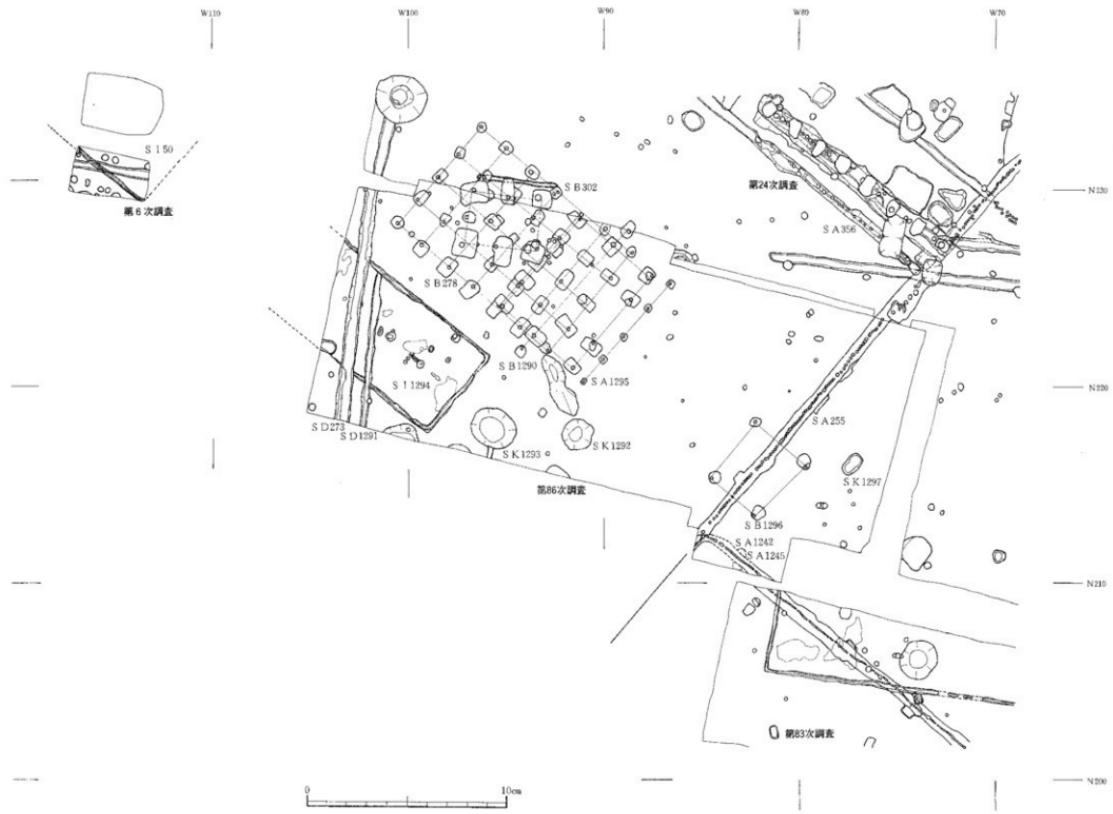
SB302は昭和57年度の第24次調査（註4）で北側の一部を検出した建物であったが、今次調査により東西2間、南北1間の大変小規模な建物であることが明らかになった。南北1間の柱間の間には柱筋がややずれるが、床東柱かとみられる小柱穴がある。このような小規模な建物はこれまで、I・II期を概観すれば内部区画施設の隣に付設される権状建物や門などがあるが、このSB302は一体構造をとる塀等が発見されず、建物が単体で建てられている。付近に隣接する構造物もみられないことから、建物の性格も不明である。

本段階に属するII期官衙を構成した遺構群は本調査区内でも極めて希薄であり、これまでの周辺地区的調査成果と同様である。II期官衙においては政庁域北側の方四町北半分の機能をどの様に捉えるか、今後の大きな課題である。

#### 〔第5段階〕 SD273 溝跡、小柱穴・ピット群

SD273はI期官衙段階のSI1294鍛冶工房跡を切っており、ほぼ真北方向に延びている。第24次調査では、第4段階の遺構とみたが、第35次調査での検討（註5）により、第5段階と訂正された。SD1291もこれと並行していることから同期の可能性があるが、詳細は不明である。

小柱穴・ピット群が発見されたが、年代など詳細は不明である。官衙廃絶以降のものとみられることから本段階に一括しておきたい。また、いくつかの土坑についても、年代性格等は明らかにできなかった。



第12図 第86次調査区周辺全体図

## IV 第87次発掘調査

### 1. 調査経過

第87次調査は、仙台市太白区郡山3丁目15-16赤井沢賢治氏より、郡山3丁目117-7・18において住宅新築計画の申し入れが、平成2年6月27日にあったことから、平成2年7月10日より敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町II期官衙の中央北寄りの地区で、外郭北辺より南約150mの位置にあり、第24次調査区の東に隣接する。この地区一帯では第24・35・61・68・83次調査により、II期官衙の一本柱列による堀跡や建物跡・井戸跡の他、I期官衙の建物群およびそれらを囲む堀跡など多くの遺構、I期官衙以前の竪穴住居跡などが検出されている。これらの調査では、今回の調査地区の西側・南側にI期官衙の倉庫群が展開していることが判明している。

7月10日から調査を開始したが、建物配置や

排土場などの関係から、敷地内の西側に第24次調査区に接して東西13.0m、南北19.7mの調査区を設定した。調査面積は274.7m<sup>2</sup>である。現状は畠地であり、耕作土の排土は重機により行った。また、遺構検出面は天地返し深耕により深くまで搅乱の及んでいるところも多かった。

検出した遺構は、第24次調査でその一部が検出されていたものを含め、当初予想された倉庫などの他、竪穴住居跡などであった。7月中旬から8月3日までは第88次調査を行い、それ以降調査を再開し、10月19日には調査を終了し、10月22日、23日に埋め戻し作業を行った。

### 2. 基本層序

基本層はI～III層の3層が確認された。遺構検出面は基本層III層上面である。

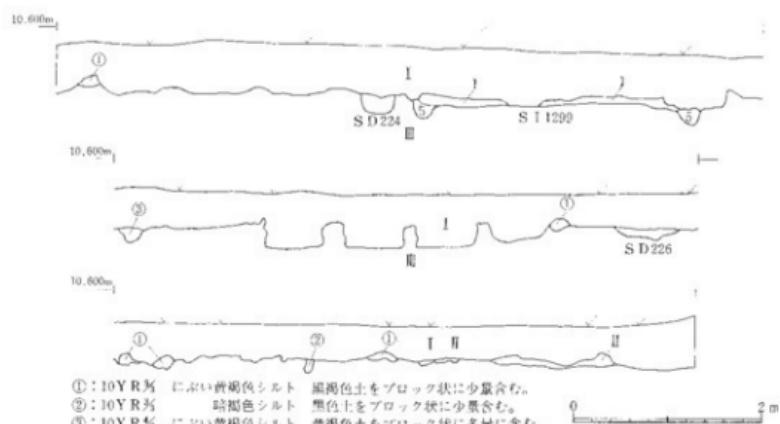
I層：2.5Y4/2 暗灰黄色シルト、現耕作土。

II層：10YR3/2 黒褐色粘土質シルト。調査区の南東コーナー付近にのみ部分的に分布する。

III層：10YR6/4 にぶい黄色シルト。調査区全域に分布する。



第13図 第87次調査区位置図



第14図 第87次調査区東壁セクション図

### 3. 発見遺構・出土物

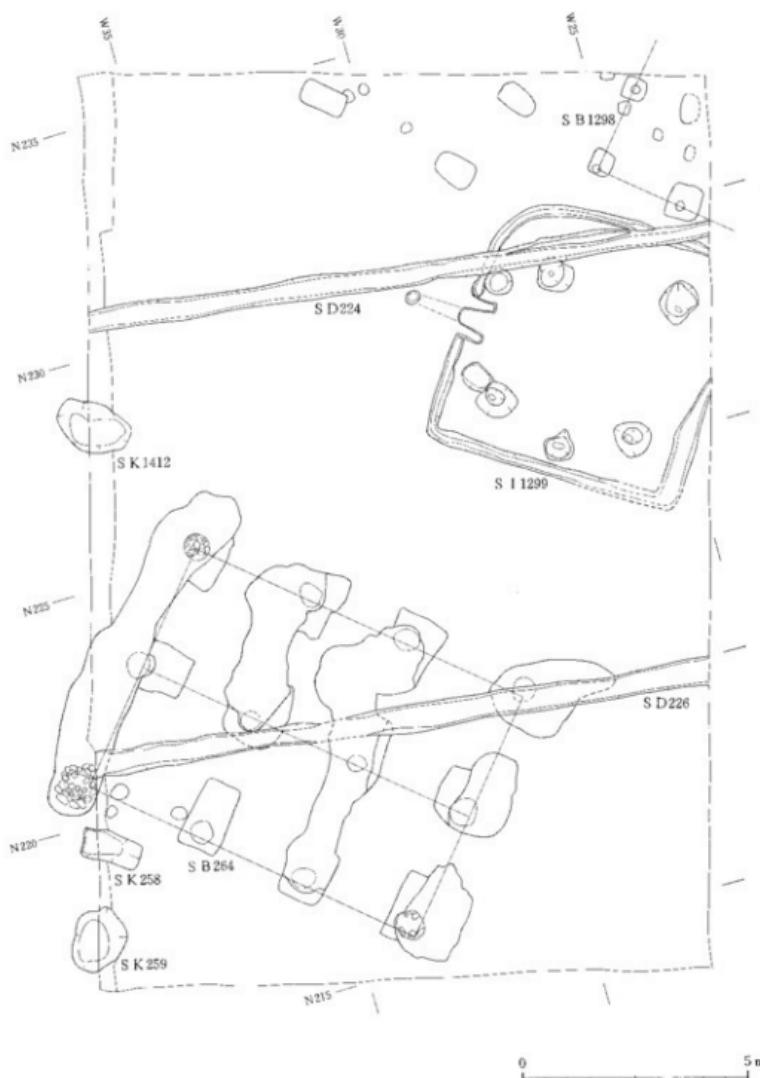
今回の調査によって発見された遺構は、掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1軒、溝跡2条、土坑3基、柱穴・ピット16基である。遺構検出面は、基本層II層が分布する調査区南東コーナー附近の他は、基本層III層上面である。

**SB264 建物跡** 衍行3間、総長7.95 m（柱間寸法275 cm、245 cm、275 cm）、梁行2間、総長5.8 m (190 cm等間) の東西棟純柱建物跡で、建物方向はN-33°-Eである。柱穴12個のうち南西隅のP9は第24次調査で検出されている。柱穴は一辺70~160 cmの方形、不整方形で、P1、P9、P12の柱痕跡底面及び下部周縁には直径5~15 cmの円窪が認められた。柱痕跡は直径47~67 cm、深さ105~120 cmで、P10を除く全ての柱穴に抜き取り穴がみられる。また、第24次調査でP9を切っていたSD256溝跡が抜き取り穴であることが判明した。SD226に切られている。

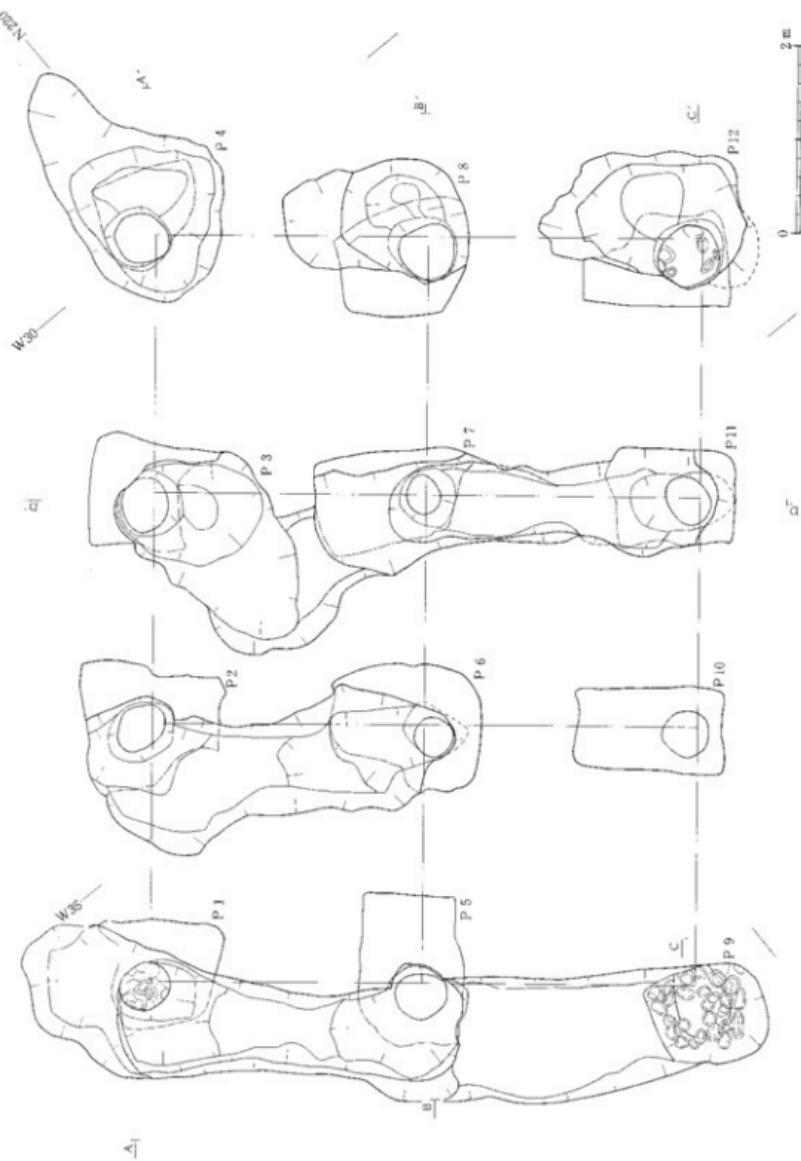
遺物は抜き取り穴から土師器破片94点、瓦破片1点、鉄製品1点、石器1点の計97点、掘り方堆積土からは土師器破片がP8から1点、P10から2点の計3点が出土している。

**SB1298 建物跡** 東西2間以上、総長2.75 m以上（柱間寸法200 cm）、南北2間以上、総長2.30 m以上（柱間寸法200 cm）の掘立柱建物跡である。南北柱列の方向はN-33°-Eである。柱穴は一辺50~80 cmの方形で、柱痕跡は直径15~20 cmである。遺物は出土していない。

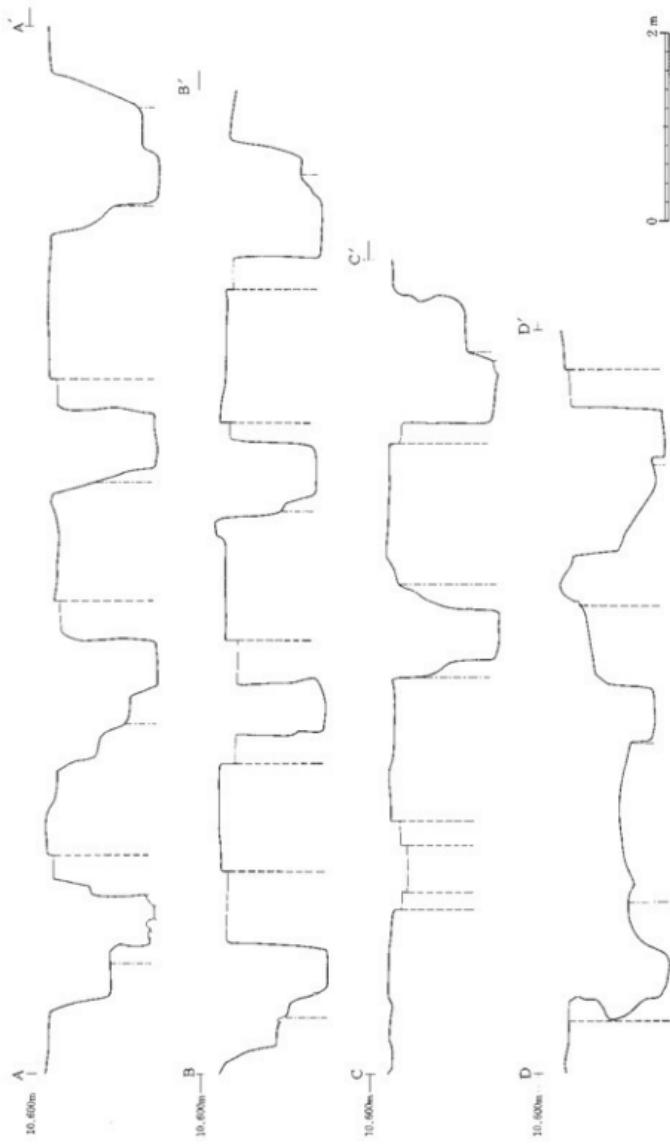
**SI1299 竪穴住居跡** 東西6 m、南北5.9 mのほぼ正方形を基調とするが、北西コーナーは弧状を呈する。また、北東コーナーは調査区外に位置している。西辺方向はN-25°-Eである。部



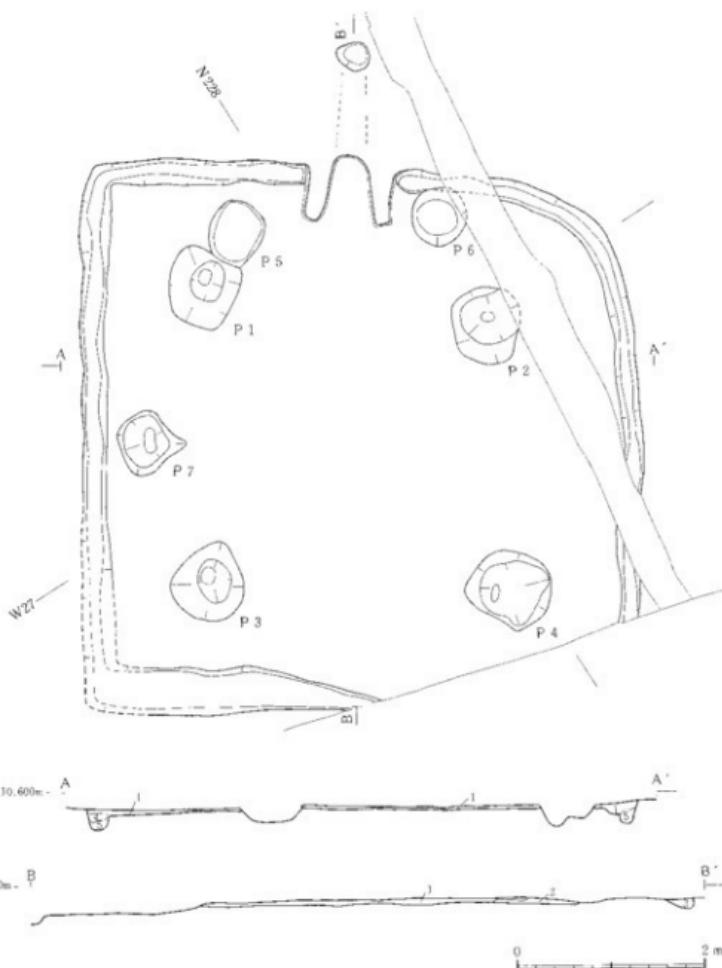
第15図 第87次調査区III層上面平面図



第16图 第87次调查区S-B264建物跡平面図



第17圖 第87次調查區 S B264建物斷面圖

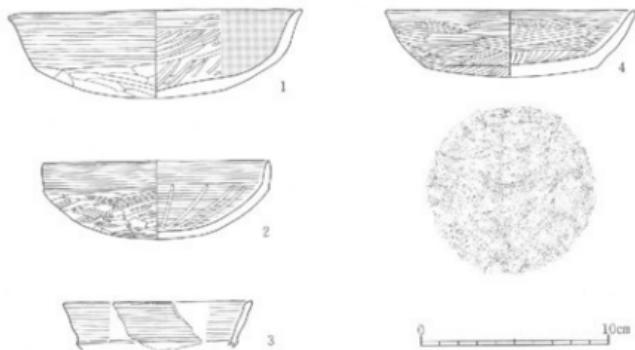


層位	土 色	土 性	圖 畜
1	10YR5/8灰黃褐色	シルト	黄褐色土を部分的にブロック状に含む。鐵化鉄を含む。
2	10YR5/8灰褐色	シルト	鐵土多量を含む。黃褐色土をブロック状に含む。
3	10YR5/8灰褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む。
4	10YR5/8灰褐色	シルト	機上耕を少量含む。
5	10YR5/8灰に近い黄褐色	シルト	黑褐色土をブロック状に含む。

第18図 第87次調査区S1 1299平面図・土層断面図

分的に床直上あるいは床下まで搅乱が及んでおり、南東コーナーは検出できなかった。残存する堆積土の厚さは4~7 cmである。カマドは西壁ほぼ中央に施設されている。幅35~60 cm、奥行70 cmで、両袖が遺存し、全面に炭火物、焼土がみられる。煙道は残存していないが、西壁から1.1 mのところに先端のピットが検出されている。床面中央部にのみ貼床が認められる。住居の堆積土はカマド燃焼部で焼土を含む黒褐色のシルトがみられる他は、灰黄褐色シルトの単層である。壁際には四周する上幅25~50 cm、床面からの深さ10~15 cmの周溝がみられる。周溝の堆積土は暗褐色・にぶい黄褐色シルトである。主柱穴は4つ（P 1~P 4）あり、直径70~90 cmの不整円形、深さ50~60 cmである。柱痕跡は不明である。各柱穴間の心心距離は、300~310 cmである。各柱穴と壁との距離はP 1・P 3は約125 cm、P 2・P 4は約150 cmである。P 5・P 6は堆積土中に焼土、炭化物を多量に含んでいる。SD224に切られている。

遺物は、堆積土1層から土師器破片19点、磨石1点、床面から土師器壺2点（C-669、C-670）、土師器破片6点（C-671他）、P 2検出面から須恵器破片1点、周溝堆積土から土師器壺1点（C-674）、土師器破片2点、P 1~7堆積土中から土師器破片18点、鉄滓1点の計51点が出土している。床面出土遺物のうち、C-669・670・671の3点は、P 7西側からの出土である。写真38のように、内面を上にしたC-669の上に、C-670の2つに割れた片方が内面を上にして部分的に重なり、もう片方もすぐ近くの床面から外面を上にした出土状態を示している。また、C-671はC-669の内面に接している。第19図には、これら3点と、東側周溝堆積土中から出土したC



番号	付録番号	種別	基軸	当土層	厚さ	外面調査		内面調査		法面 cm	堆存 位置	等級	
						口縁部	全体・有無	口縁部	井戸・底盤				
1	C-669	1982	井	S1-1299	床面	ヨコナメ	ハラゲリ	オコテ	ハウミゼ、黒褐色	4.2	15.6	良	
2	C-670	1985	井	S1-1299	床面	ヨコナメ	ハラゲリ	ヨコナメ	ハウミゼ	4.1	12.7	良	
3	C-671	1982	井	S1-1299	床面	ヨコナメ、円錐	—	ヨコナメ、井戸	—	—	良	54-10	
4	C-674	1982	井	S1-1299	周溝	ヨコナメへラしき	ハラゲリ・ハウミゼ	ハラゲリ	ハウミゼ	3.6	13.4	良	50-9

第19図 第87次調査区S1 1299堅穴住居跡出土遺物実測図

-674 を図示した。

土師器 C-669(第19図1)：器形は、体部下半の外面に軽い稜をもち、口縁が外反気味に立ち上がり、底部は丸底の壺である。完形に復元され、口径 15.6 cm、器高 4.7 cm、器厚 3~7 mm を測る。胎土は緻密であるが砂粒を含んでいる。調整は、外面上半はヨコナデ、そのち下半をヘラケズリ、内面はヘラミガキのち黒色処理が施されている。外面下半の軽い稜はヘラケズリによって形成されたものである。外面の色調は灰白色を呈し、黒斑も認められる。

土師器 C-670(第19図2)：器形は、体部上半の外面に段をもち、口縁が直立気味に立ち上がり、底部は丸底の壺である。口縁の外面側にややふくらみをもつ。ほぼ完形に復原され、口径 12.2 cm、器高 4.1 cm、器厚 4~5 mm を測る。胎土は極めて緻密であり、砂粒の混入はほとんどない。調整は、外面上半はヨコナデ、下斗はヘラケズリのち部分的なヘラミガキ、内面はヨコナデのち体下半に放射状のヘラミガキがまばらに11条暗文風に施されている。色調は外面とも暗褐色を呈しており、内面には黒色を呈する部分もあるが、黒色処理とは異なる。

土師器 C-671(第19図3)：口縁部の破片である。口縁の復元は難しいが、器形は小形の壺あるいは高壺の可能性がある。体部の外面に段をもち、口縁は直接的に外傾して立ち上がる。器厚は 3~4 mm である。胎土は極めて緻密であり、砂粒の混入はほとんどない。調整は内外面とも段より上はヨコナデ、下は不明である。外面とも丹塗りが施されている。同一個体と考えられる口縁部破片が床面から 1 点(C-672)、基本層Ⅰ層中から 1 点(C-673)の計 2 点が出土している。

土師器 C-674(第19図4)：器形は、体部下半の外面に稜をもち、稜のすぐ上でややくびれ口縁へはわずかに内湾しながら立ち上がり、底部は丸底の壺である。内面に段はない。口縁部を一部欠損している。口径 13.4 cm、器高 3.6 cm、器厚 4~8 mm を測る。胎土は緻密であるが砂粒を含んでいる。調整は、外面上半はヨコナデのちヘラミガキ、下半はヘラケズリのちヘラミガキが施されている。口縁端部にはヨコナデが残存している。内面にはヘラミガキが施されている。外面の色調は灰白色を呈し、部分的に黒斑が認められる。底部外面にはヘラ書きにより、「+」と記されている。本来、黒色処理が施されていたか否かについては不明である。

これら 4 点の遺物は、その出土状況からこの遺構に伴うものである。

この他、小破片であるため、図示しえなかったが周溝埋土中からは土師器 C-675 壺破片、堆積土 1 層中からは土師器 C-676 瓢片が出土している。C-675 は、口縁部から体部にかけての破片である。器形は、体部からわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外方へひらく。調整は、外面がヨコナデのちヘラミガキ、内面はヘラミガキのち黒色処理が施されている。C-676 は体部下半の破片であり、甕の可能性もある。調整は外面がヘラミガキ、内面はヘラケズ

りのうちヘラミガキで、ヘラミガキの単位幅は3~6 mmである。

**SD224 溝跡** 第24次調査で検出されており、直角に屈曲し、直線的に北と東へのびる溝跡である。今回の調査では、その東方への続きを検出した。検出長 13.6 m(東西総長 26.3 m 以上)、上幅40~55 cm、下幅15~40 cm、深さ 20 cm 程である。方向は W-0°-E で、さらに東方へのびる。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は基本的に暗褐色シルトの単層であり、基本層II層を起源とする黄褐色土をブロック状に含んでいる。しかし、SI1299 と重複する部分では北壁の立ち上がりが二段になっており、それに対応するように堆積土が 2 層に分かれている。SI1299 を切っている。

遺物は堆積土中から土師器破片22点、須恵器破片 1 点、小玉石 1 点の計24点が出土している。

**SD226 溝跡** 第24次調査で検出されており、東西方向へのびる溝跡である。今回の調査では、その東方への続きを検出した。検出長 13.2 m(総長 71.2 m 以上)、上幅40~60 cm、下幅30~50 cm、深さ 10 cm 程である。方向は W-0°-E で、さらに東方へのびる。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は灰黄褐色シルトの単層である。SB264 を切っている。

遺物は堆積土中から土師器破片 1 点が出土している。

**SK258 土坑** 第24次調査で西半部が検出されている。長軸 1.27 m、短軸 0.53 m の長方形で深さ 50~60 cm、底面には凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は 4 層に分かれ、黒褐色シルト、黄褐色・浅黄色砂質シルトである。

**SK259 土坑** 第24次調査で西半部が検出されている。長軸 1.45 m、短軸 1.13 m の不整梢円形で、深さ 45 cm である。堆積土は暗褐色シルトで基本層III層をブロック状に含む。

遺物は、今回の調査で堆積土中から土師器破片 1 点が出土している。

**SK1412 土坑** 第24次調査で西半部が検出されている。長軸 1.65 m、短軸 1.10 m の不整梢円形で、深さ 22 cm である。今回の調査での出土遺物はない。

#### 4. まとめ

今回の調査では、第24次調査で検出されていた SB264、SK258、259、1412 の全容と、SD224、SD226 がさらに東方へのびることが判明した。また、新たに SB1298、SI1299 が検出された。これらの遺構の所属時期については、以下のことが考えられる。

SB264 は、その建物方向及び第24次調査で検出されていた SB236(東西棟総柱建物跡)と同規模で、東西に軸を連ねる配置関係にある。SB236 は I 期官衙(第3段階)に所属することが考えられており、SB264 もこれと同時期に位置付けられる。また SB1298 は、建物方向が SB264 と同じ数値を示しており、I 期官衙(第3段階)に伴う可能性がある。

SD224、226 は、第24次・35次調査により第5段階以降であることが示されているが、SK258、

259、1412については所属時期は不明である。

SI1299については出土遺物の検討を行いたい。第19図に示された4点の土師器坏は、器形・法量においてそれぞれ異なり、胎土・色調・調整の点でも異なる面がある。郡山遺跡ではこうした組み合わせを示す検出例はなく、個々の遺物についても類似する例は極めて少ない。その中で、土師器C-670坏には、器形及び調整から類例を求めるに、第24次調査で2点の報告例(C-182、C-176)がある(註6)。しかし、2点とも口径が14.8cmと、C-670が12.2cmなのに比べて大きく、口縁部の立ち上がりはほぼ垂直であり、最大径を体部中位の段に有するが、C-670の口縁部の立ち上がりはわずかに外へ開き、最大径が口縁部にある点で異なる。また2点のうちC-182は、I期官衙以前の第2段階に位置付けられているSI260堅穴住居跡床面から出土しており、器形は異なるが同様の胎土・色調・調整を示す土師器坏2点(C-181、C-183)と、体下端部に丹塗りの施された壺1点(C-185)を伴っている。これらの共伴する遺物はSI1299からは出土しておらず、SI260との関連性には、なお検討を要する。

次に、郡山遺跡周辺にC-670の類例を求めるに、名取市清水遺跡第53号住居跡出土遺物があげられる。この住居跡からは、土師器坏4点と壺2点が出土遺物として報告されているが、そのうちの坏2点(登録番号:53住-2・4)にはC-670との器形的な類似性が認められる。C-670に比べ、器形において口径に対する器高の比率がやや小さく、法量の点では14cm前後と幾分大きいという差違はあるが、口縁の立ち上がりや、胎土、色調、調整は酷似している(註7)。他の2点(登録番号:53住-1・3)については、53住-1はC-669と口縁がわずかに外反して立ち上がる点では類似しているが、器形的にはやや異なる。53住-3はC-670と胎土、色調、調整において類似するが、むしろ器形をも含めて前述したSI260出土のC-182との強い類似性を示している。

この第53号住居跡出土遺物は、第40号住居跡出土遺物などとともに清水遺跡第III群土器を構成しており、土師器型式編年では住社式に比定され、第40号住居跡出土の須恵器には6世紀中頃の年代が与えられている(註8)。また、最近では住社式を二つに分け、第1・第2段階とし、清水遺跡第III群土器を第1段階に位置付ける見解も示されている(註9)。清水遺跡第III群土器にはSI1299出土のC-669・671・674のような土器は含まれていないが、内外面丹塗りの壺(C-671)は、住社式には認められるが(註10・11・12)、栗圓式ではあまりみられず、仙台市栗遺跡からはまったく出土していない(註13)。これらのことから、SI1299の時期は、出土遺物から清水遺跡第III群土器を介して郡山遺跡では第2段階に所属する可能性が考えられる。尚、C-670には清水第III群土器の類似例と比べ口径が小さく、年代的にやや遡る可能性もあること、C-674については国分寺下層式(註14)の壺との類似性もあり、またC-670とC-669・674には胎土・色調・調整に明らかな相違がみられることから、それらの出自とともに、このSI1299住居跡の年代的位置付けについては、今後、更なる検討が必要である。

## V 第88次発掘調査

### 1. 調査経過

第88次調査は、仙台市若林区石名坂7番地、福仙興業代表取締役加藤文三氏より、太白区郡山3丁目120において住宅新築計画の申し入れが平成2年5月18日にあったことから、平成2年7月10日より敷地内の発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町II期官衙の中央北東寄りの地区で、外部北辺より南約120mの位置にあり、第87次調査区の北東に接近している。今回の調査地区の西南方では第88次調査、第31次調査(A区)、第24次調査(C・D区)において掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出されている。

7月10日から調査を開始したが、建物配置や排土場などの関係から、敷地内の西側に東西7.5m、南北12.1mの調査区を設定した。調査面積は80.5m<sup>2</sup>である。現状は畠地に盛土がなされており、耕作土、盛土の排土は重機により行った。また、遺構検出面は天地返し深耕により深くまで攪乱の及んでいるところが多かった。検出された遺構は一本柱列と土坑などであった。8月3日に調査を終了し、8月8日に埋戻し作業を行った。

### 2. 基本層序

基本層はI・II層の大別2層、細別3層が確認された。

Ia層：10YR3/4 暗褐色シルト。旧耕作土。

I6層：2.5Y4/1 黄灰色シルト。部分的な分布を示す。

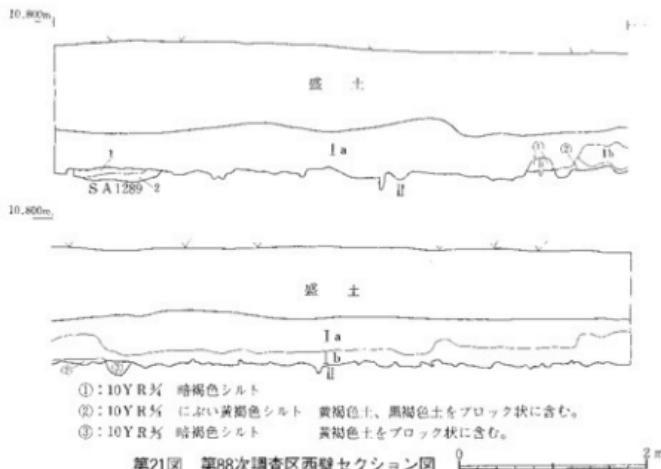
III層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト。地点的に砂粒を含むところがある。



第20図 第88次調査区位置図

### 3. 発見遺構・出土遺物

今回の調査によって発見された遺構は、一本柱列1条、土坑5基、柱穴・ピット20基である。遺構検出面は、基本層II層上面である。



**SA1289 一本柱列** 検出長は 13.0 m で、きらに南北へのび、方向は N-34°-E である。布掘りは上幅 40~60 cm、深さ 10~12 cm で、底面は平坦、壁はやや斜めに立ち上がる。柱痕跡は直径 15~25 cm の円形で、10 本を確認した。間幅は 60~80 cm である。柱痕跡はいずれも堆積土 2 層上面での検出であり、堆積土 1 層上面では確認されない。布掘りの埋土は 2 層に分かれ、1 層は灰黄褐色シルト、2 層はにぶい黄褐色粘土質シルトである。SK1285、SK1284 に切られている。

遺物は、埋土 1 層中から土師器破片 27 点が出土している。

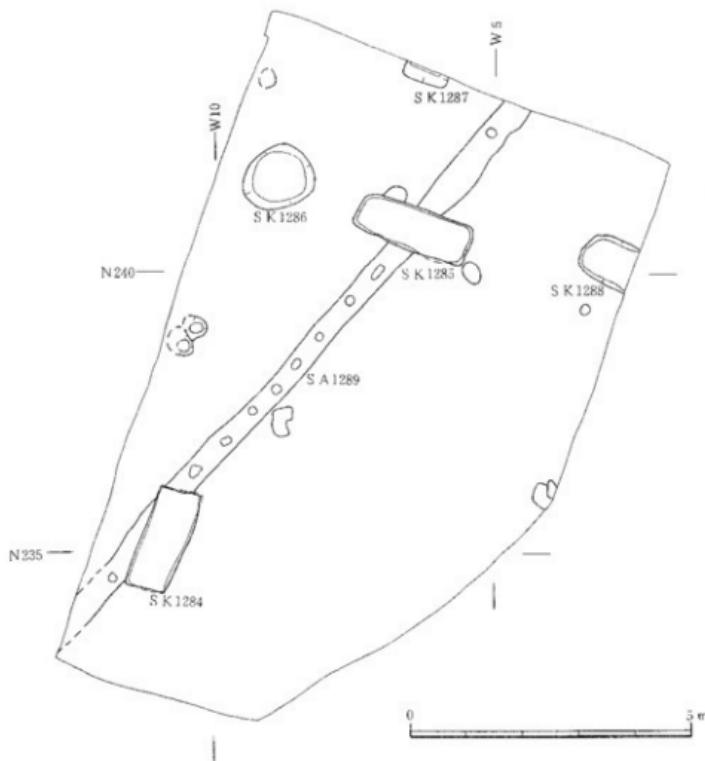
**SK1284 土坑** 長軸 18.5 cm、短軸 82 cm の長方形で、深さ 50 cm、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。長軸方向は N-13°-E である。堆積土は 3 層に分かれ、黒褐色、黄褐色のシルトあるいは粘土質のシルトであり、いずれも基本層 II 層を起源とする黄褐色土をブロック状に含んでいる。人為的な堆積土と考えられる。SA1289 を切っている。

遺物は、堆積土中から土師器破片 48 点、小玉石 1 点の計 49 点が出土している他、堆積土中からは炭が比較的多く出土している。製作にロクロを使用した土師器破片は確認されていない。

**SK1285 土坑** 長軸 210 cm、短軸 80 cm の隅丸長方形で、深さ 20 cm、底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。長軸方向は W-12°-N である。堆積土は単層で黒褐色シルト、掘り方埋土は褐色の砂質シルトである。SA1289 を切っている。

遺物は、堆積土 1 層中から土師器破片 16 点が出土している。

**SK1286 土坑** 東西 130 cm、南北 115 cm のほぼ円形で、深さ 16 cm・底面はほぼ平坦で、



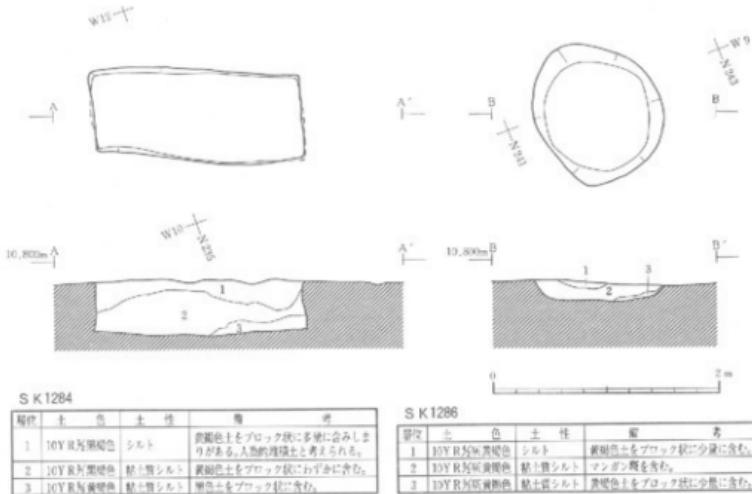
第22図 第88次調査区Ⅱ層上面平面図

壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、灰黄褐色のシルト、粘土質シルトである。

遺物は堆積土1層中から土師器破片10点、2層中から土師器甕1点(第24図、C-681)、土師器破片6点、小玉石1点の計18点が出土している。

**SK1287 土坑** 東西80cm、南北25cm以上で、方形を基調としており、深さは22cm、底面はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、1層は黒褐色シルト、2層はにぶい黄褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

**SK1288 土坑** 長軸95cm以上、短軸82cmの隅丸長方形あるいは梢円形で、深さは13cm、底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。堆積土は2層に分かれ、1層は黒褐色シルト・2層はにぶい黄褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。



第23図 第88次調査区 S K1284・S K1286平面面図

#### 4. ま と め

第88次調査では、一本柱列1条、土坑5基が検出されたが、第88次調査などで検出されている掘立柱建物跡、竪穴住居跡は検出されなかった。このうちSA1289一本柱列は、I期官衙の建物群、棚木列などの方向とほぼ同じであり、第3段階に所属する可能性が考えられる。またSK1286は、出土した土器類(C-681)から、第2～4段階に所属するものと考えられるが他の土坑について、SK1284、1285が第3段階以降、SK1287、1288については所属時期は不明である。



登録番号	種 別	基形	出土遺物	層 位	外 表 調 査	
					内 容	調査
C-681	土器部	盤	S K1286	2 層	188×120mm(底部ハラケなし)底毛なし	
				口 高	口 径	残存 写真回数
				17.5cm以上	17.3cm	1/4 54-12

第24図 第88次調査区 S K1286出土遺物実測図

## VI 第89次発掘調査

### 1. 調査経過

第89次調査は、郡山5丁目50他の約800m<sup>2</sup>を対象として、平成2年10月23日より発掘調査を実施した。

調査対象地区は、方四町II期官衙の南辺、東端と南門の中点から南へ約50mに位置し、第65次調査区の北に近接する。第65次調査では、真北方向を基準とする掘立柱建物群、住居跡などが検出されており、今回の調査はこれらの遺構の北方への広がりの確認を主たる目的とした。

10月23日から調査を開始したが、敷地、排土場の関係から、北側に東西4m、南北23.5mの調査区(北区)、南側に東西30m、南北15~9mの調査区(南区)を設け、6m×6mのグリッドを設定した。調査面積は429.1m<sup>2</sup>である。現状は水田であり、現耕作土を重機により排土した。基本層III上面と、IV層上面の2面で遺構を検出したが、IV層上面で検出した遺構の掘り込みは行わなかった。12月4日に調査を終了し、12月10日・11日に埋め戻し作業を行った。

### 2. 基本層序

基本層はI~IV層の大別4層、細別7層が確認された。南区北壁セクションラインは現畦畔直下に近い位置にある。また北区ではI及びIV層を除く他の層は層厚も薄く、安定した分布を示していない。そのため、各基本層の層厚、分布などは南区を中心として述べることにする。

I層：7.5Y5/1灰色粘土質シルト。現水田耕作土。

II a上層：5Y6/1灰色シルト。南区全域に分布する。層厚は5~13cm。南区西端では層厚を増し(15~20cm)、下面となるII a下層とIII層上面には細かな凹凸が認められる。

III a下層：2.5Y6/2灰黄色シルト。南区西端部、東端部には分布しない。層厚は3~10cm。下面には細かな凹凸が認められる。

II b層：2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト。南区全域に分布する。層厚は5~10cm。下面には細か



第25図 第89次調査区位置図

な凹凸が認められる。中性の水田土壌。下面是遺構検出面。

III層：10YR4/1 黒灰色シルト質粘土。南区全域に分布する。層厚は5～15cm。下面には細かな凹凸が顕著に認められる。基本層IV b層を起源とする黄褐色土をブロック状に含む。水田土壌の可能性が考えられる。

IV a層：10YR3/1 黑褐色粘土質シルト。南区東端部、北区に認められる。層厚は5～15cm。基本層IV b層を起源とする黄褐色土をブロック状に含む。

IV b層：2.5Y7/4 浅黄褐色粘土質シルト。南区、北区全域に分布する。遺構検出面。

### 3. 発見遺構・出土遺物

今回の調査では、II b層下面とIV層上面で遺構が検出された。また基本層I～III層中及びIV層上面から遺物が出土している。

(1) II b層下面の調査：II b層下面には基本層III層、IV a層、IV b層が分布する。南区中央部ではIII層上面で畦畔状の高まりが1条、南区東端部ではIII～IV b層の各層が分布する範囲で、段差及び、水口状の落ち込みが検出された。この段差の延長は、北区南端で確認されている。東端部での状況は、段差及び水口状の遺構がII b層を耕作土とする水田跡に伴うものであることを示しており、南区中央部の畦畔状の高まりは擬似畦畔B（註15）として理解することが可能である。

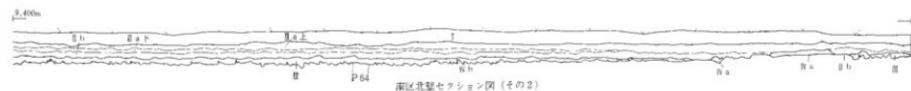
II b層からは総数116点の遺物が出土しているが、土器・瓦はすべて破片であり、特に集中する分布は示していない。それらの種別と点数は、土師器68点、須恵器16点、磁器2点、陶器1点、土器小破片25点、瓦2点、石製品1点、鉄滓1点である。出土した陶器・磁器は、中世、近世のものであり、III層中出土遺物の年代をふまると、この水田跡（II b層水田跡）は、15世紀以降の中世から近世の間に位置付けられる。

(2) IV層上面の調査：III層下面には基本層IV a層、IV b層が分布する。南区東端部、北区南端部ではII b層水田跡と同様の位置に段差が検出されており、III層を耕作土とする水田跡が存在していた可能性もある。南区西半部のIV b層上面で検出されている小溝状の遺構は、埋土が基本層IIIであることから、水田耕作に伴うものであることも考えられる。

III層中からは総数358点の遺物が出土しており、陶器、磁器、古銭などから、その下限は中世（14～15世紀）と考えられる。また、土師器や須恵器の破片も比較的多く出土しているほか、円筒埴輪の破片も1点認められた。

次に、IV層上面では溝跡11条、性格不明遺構2基、ピット67基が検出されている。

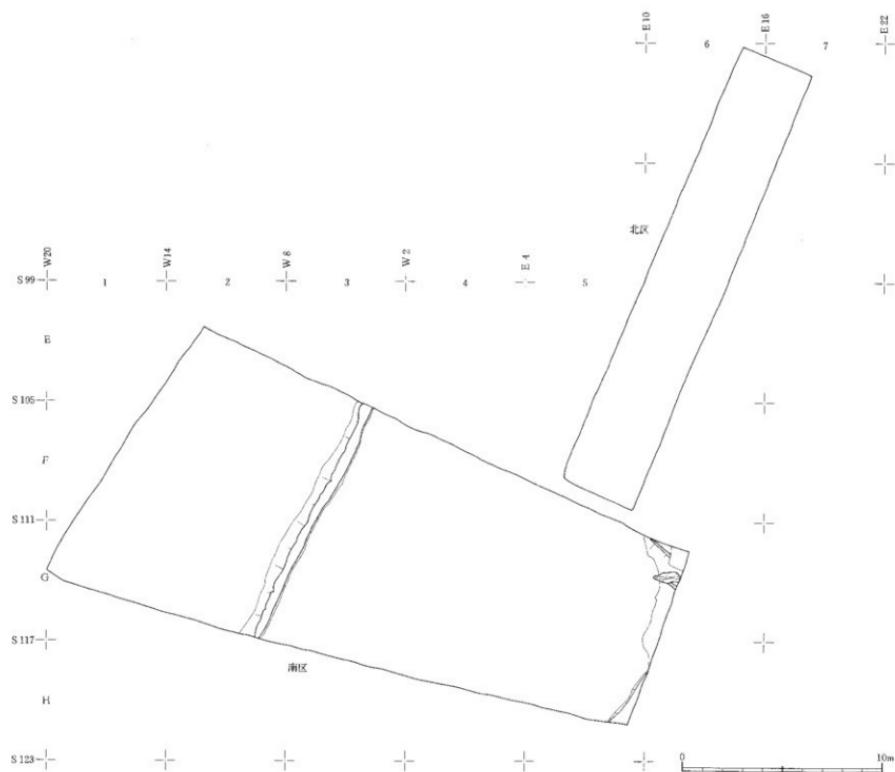
**SD984 溝跡** 第65次調査で検出されており、東西方向へのびる溝跡である。検出長17.2m、上幅1.8m以上である。方向はE-1°-Sである。確認面の堆積土は黄灰色粘土質シルトである。



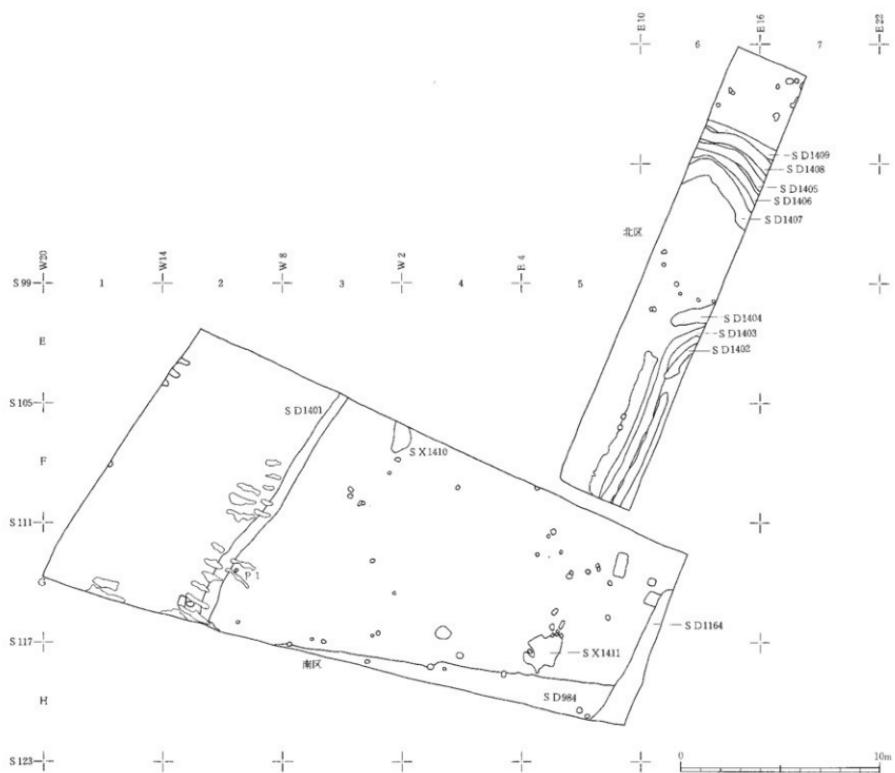
① 10YR2/4暗褐色 粘土質シルト 10YR明眞褐色シルトをまだらに含む、少量の酸化鉄・マンガンを含む。



第26図 第89次調査区土層断面図



第27図 第89次調査区Ⅲ層上面平面図



第28図 第89次調査区IV層上面平面図

SD1164 に切られている。遺物は確認面から土器破片 2 点、須恵器破片 1 点、土器小破片 1 点の計 4 点が出土している。

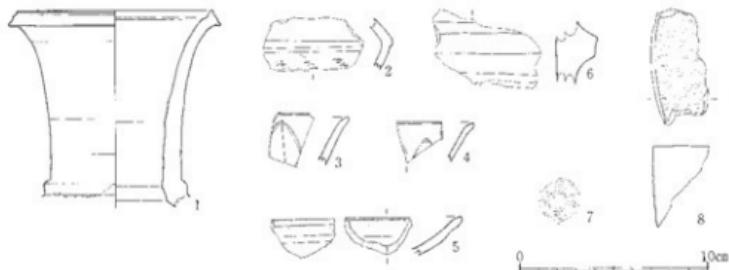
**SD1164 溝跡** 第65次調査で検出されており、南北方向へのびる溝跡である。検出長 7.7 m、上幅 1.5 m 以上である。調査区内で西側の上端は途切れている。方向は N-19°-E である。確認面の堆積土は黄灰色粘土質シルトである。SD984 を切っている。

遺物は確認面から鉄滓 1 点が出土している他、円礫が比較的多くみられる。

**SD1401 溝跡** 南区西半部 E-G-2・3 グリットで検出されており、南北方向へのびる溝跡である。検出長 13.5 m、上幅 50~70 cm である。方向は N-26°-E である。確認面の堆積土は暗灰黄色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

**SD1402~SD1407 溝跡** 北区において IV a 層上面で検出されている。この 6 条の溝跡は、堆積土の類似性、方向性などから、SD1402 と SD1405、SD1403 と SD1406、SD1404 と SD1407 が、それぞれ同一の溝跡と推定される。これらは小溝状遺構群(註16)として理解される。SD1402 と SD1405 は、それぞれ SD1403、SD1406 を切っている。上幅 40~80 cm、堆積土中にはいずれも基本層 IV b 層を起源とする黄褐色土をブロック状に含んでおり、一部掘り込みを行った東壁の断面では、SD1402~1404 の底面に凹凸のあることが認められた。プラント・オーパール分析の結果をも考えると、煙跡の可能性が考えられる。遺物はいずれの溝跡からも出土していない。

**SD1408 溝跡** 北区 C-D-6・7 グリットで検出されている。やや弧状を呈して東西方向に



発見番号	種別	器形	出土遺構・施区	層位	備考	写真図版
1	E-324	須恵器	壺	F-1	口径 11.3cm、口徑一部の 5%	54-15
2	E-320	須恵器	壺	G-4-a-b	破片	54-14
3	J-8	瓶	瓶	G-3	Ⅱ b 層 瓶足窓系、口縁部破片	54-20
4	J-9	瓶	瓶	F-2-a	Ⅱ c 層 瓶足窓系、口縁部破片	54-19
5	I-29	陶器	壺	G-3	Ⅱ a 層 瓶、灰釉、11 時・12 時・13 時・14 時部破片	54-18
6	P-21	円筒埴輪	-	G-3-c	Ⅱ b 層 凸唇上幅 37cm、下幅 27cm、高さ 1.0cm	54-16
7	N-51	滑 線	G-4-c	Ⅲ層	溝跡通室(昭和 1988 年)	
8	K-27	石 目	1	G-4-a	Ⅲ層	54-17

第29図 第89次調査区出土遺物実測図

のびる溝跡である。検出長 3.8 m、上幅 55 cm である。確認面の堆積土は褐灰色粘土質シルトである。SD1409 を切っている。遺物は出土していない。

**SD1409 溝跡** 北区 C-6・7 グリットで検出されており、東西方向にのびる溝跡である。検出長 3.8 m、上幅 50 cm、方向は N-73°-W である。SD1408 に切られている。遺物は出土していない。

**P 1 ピット** 南区西半部 G-2 グリットで検出されている。径 18×16 cm である。堆積土は黄灰色シルト質粘土である。須恵器壺 (E-324) の頭部が体部の方を下にして出土している。口縁部から頸部の破片が、その周辺の III 層中から出土している。

#### 4. ま と め

今回の調査では、II b 層を耕作土とする中世から近代にかけての水田跡、IV 層上面で溝跡 5 条、小溝状造構群などを検出したが、第65次調査で検出されたような官衙に直接関連する真北方向を基準とした掘立柱建物跡などは検出されなかった。しかし、出土遺物は古墳時代から近世に及んでおり、中世から近世にかけては生産域として利用されていたことが明らかとなった。

# 仙台市郡山遺跡（第89次調査区）における プラント・オパール分析

古環境研究所

## 1. はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、郡山遺跡（第89次調査）における稻作跡の検証と探査およびイネ科栽培植物の検討を行ったものである。

## 2. 試 料

調査地点は、南区北壁と北区東壁および南区の3箇所である。調査区の土層はI層～IVb層に分層され、このうちI層～III層では発掘調査によって水田層の可能性が認められていた。また、北区東壁では小溝状遺構が検出され、畠跡の可能性が考えられていた。試料は、容量50cm<sup>3</sup>の採土管を用いて、各層ごとに5～10cm間隔で採取された。試料数は計11点である。

## 3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1)試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
- (2)試料土約1gを秤量、ガラスピーツ添加（直徑約40μm、約0.02g）

※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量

- (3)電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4)超音波による分散（300W・42KHZ・10分間）
- (5)沈底方による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6)封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7)検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーツ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーツ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーツ個数の比率をかけて、試料1g中のブ

ラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞壁酸体1個あたりの植物体乾重単位・ $10^{-5}$  g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亞科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である。（杉山・藤原、1987）。

#### 4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1と図1に示す。なお、稻作跡の検証が主目的であるため、定量はイネ、ヨシ属、タケ亞科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

#### 5. 考察

##### (1)稻作の可能性について

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稻作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稻作の可能性について検討を行った。

南区北壁では、I層～IVb層について分析を行った。その結果、IVb層を除く各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、I層、IIa層上部、IIb層では密度が20,000個/g以上と非常に高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層で稻作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。また、IIa層下部、III層、IVa層でも密度が10,000個/g前後と高いことから、稻作の可能性は高いと考えられる。これらのことから、同地点ではIVa層の時期から現在まで、ほぼ継続して稻作が営まれたものと推定される。

北区東壁では、小溝状遺構の埋土（SD1402～SD1404）について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネのプラント・オパールが4,900～9,800個/gと高い値で検出された。したがって、同遺構で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。

南区では、溝状遺構の埋土（No.1）について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールが7,500個/gと高い値で検出された。したがって、同遺構で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。

##### (2)イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものには、イネ以

外にもキビ族（ヒエやアワなどが含まれる）やムギ類などがあるが、これらのプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。

なお、プラント・オパール分析で復元できる植生はイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畠作物は対象外となっていることに留意されたい。

### ＜参考文献＞

杉山真二・藤原宏志、1987、川口市赤山陣跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山古環境誌一、川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298。

藤原宏志、1976、プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9: 15-29。

藤原宏志、1979、プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜ノ式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産量の推定－、考古学と自然科学、12: 29-41。

藤原宏志・杉山真二、1984、プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17: 73-85。

表1 プラント・オパール分析結果

(仙台市・郡山89次)

南区北壁-1

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個/g	(標総量) t/10a	ヨシ 個/g	タケ 葉科 個/さ	ウシクサ族 個/さ	キビ 族 個/g
1	0	18	0.92	24,400	41.72	0	14,500	900	0
2a-1	18	8	1.03	20,100	17.06	800	12,900	4,800	0
2a-2	26	4	0.95	9,200	3.58	900	14,800	2,700	0
2b	30	6	1.05	22,700	14.77	800	15,100	5,800	0
3	36	10	1.01	12,800	13.18	0	9,300	1,700	0
4b	16	-	0.98	0	-	0	6,900	0	0

南区北壁-2

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個/g	(標総量) t/10a	ヨシ 個/g	タケ 葉科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ 族 個/g
4a	28	7	0.91	11,800	7.64	0	26,100	2,500	0

北区東壁-小溝

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個/g	(標総量) t/10a	ヨシ 個/g	タケ 葉科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ 族 個/g
SD1402	21	15	0.86	9,800	12.98	1,600	16,400	800	0
SD1403	23	9	0.90	5,800	4.73	1,600	21,700	7,500	0
SD1404	23	12	0.82	4,900	4.94	800	18,800	2,400	0

南区-小溝

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比量	イネ 個/g	(標総量) t/10a	ヨシ 個/g	タケ 葉科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ 族 個/g
No.1	0	10	1.03	7,500	7.83	0	17,300	1,500	0

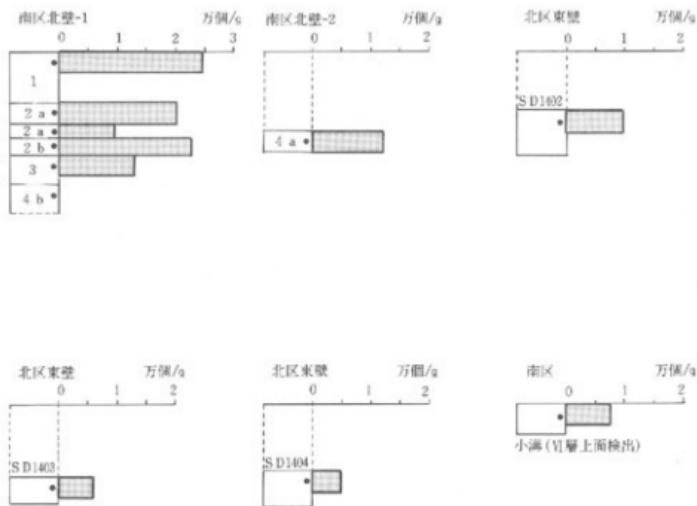


図1 イネのプラント・オパールの検出状況

(注) ▲印は50cmのスケール、●印は分析試料の採取箇所

## VII 総括

今年度は、昭和60年以降実施してきた第2次5ヶ年の調査に引き続き策定された「郡山遺跡緊急確認調査」第3次5ヶ年計画の初年次にあたり、I期官衙の中核遺構の確認を目的としてII期官衙内中央地区での調査を予定していた。また、その他に住宅建築等に伴う発掘届が提出され、同地区での小規模な事前調査を2件予定していた。第83次調査は昨年度調査の第83次調査区および昭和57年度調査の第24次調査区に隣接しており、埠で区画されたI期の官衙ブロックの確認に主眼をおいた。調査の結果、官衙内部を区画した材木列・板塀の変遷が認められ、大形の柱を持つ倉庫建物が軒を備えて建ち並んでいることや、竪穴建物による鍛冶工房跡等が発見され、I期官衙内部の様相が次第に明らかになりつつある。また、II期官衙外郭南辺外での調査は、第65次調査（註17）で大形の掘立柱建物跡が発見されたことから、この北側地区的遺構確認を目的として実施した。

### 1. I期官衙の調査

I期官衙を構成する遺構は第86・87・88次調査において発見された。

第24・83次調査で発見されていたSA255 材木列とSA1242 板塀は第86次調査区内で直交する推定位置関係にあったが、調査の結果、先行して造られた材木列の後に板塀が造られており、板塀は材木列との接続位置で直角に屈曲して、南に伸びる材木列位置に重複している。また、板塀に先行して同位置にSA1245一本柱列があり、材木列との新旧関係・接続状況は不明であるが、当初はこの一本柱列と材木列が同時に機能していた可能性が考えられる。さらに材木列・板塀とも抜き取りの跡が見られないことから、一時期、両者は同時に機能していたものとみておきたい。先行するSA255の段階では、西側に官衙ブロックや今回明らかになった工房ブロック等の院が連なり、東側には倉庫群が形成されたものとみられる。次にSA255に接続するSA1245・1242が東側に造られ、それまで倉庫群が置かれていた地区は塀によって区画され、倉庫群とは異なった機能を持つ官衙の一画となったものとみておきたい（註18）。

第86次調査で発見された鍛冶工房跡は、これまでの調査で知られていた竪穴建物跡（註19）としてきた遺構と同様の形態を呈している。竪穴建物は主にI期官衙段階の遺構群の中に見られたが、上屋構造・性格等が明らかでなく、一部のものについては厨・竈屋等の雜舎の可能性を指摘（註20）したが、官衙内での機能的位置づけは検討課題としてきた。今回発見したSI1294は遺構内の炉の状況や出土遺物の状況等から鍛冶工房跡とみられ、竪穴建物の具体的機能が初めて明らかとなった。しかし、これまで調査してきた竪穴建物跡とは内部の状況が異なっていることから、竪穴建物の機能が单一限定のものでないことも明らかである。

第86次調査で鍛冶工房跡に隣接して発見された掘立建物跡は新旧2棟が重複しているが、いづれも他の官衙・倉庫ブロックの中では殆どみられない建物である。とくに棟持柱を持つ建物はこれまで例がなく、神殿建物との類似性が考えられたが、地方官衙内における神事に関わる施設の在り方、鍛冶工房施設と神事に関わる施設との関連、の2点についての可能性を今後の検討課題として指摘しておきたい。

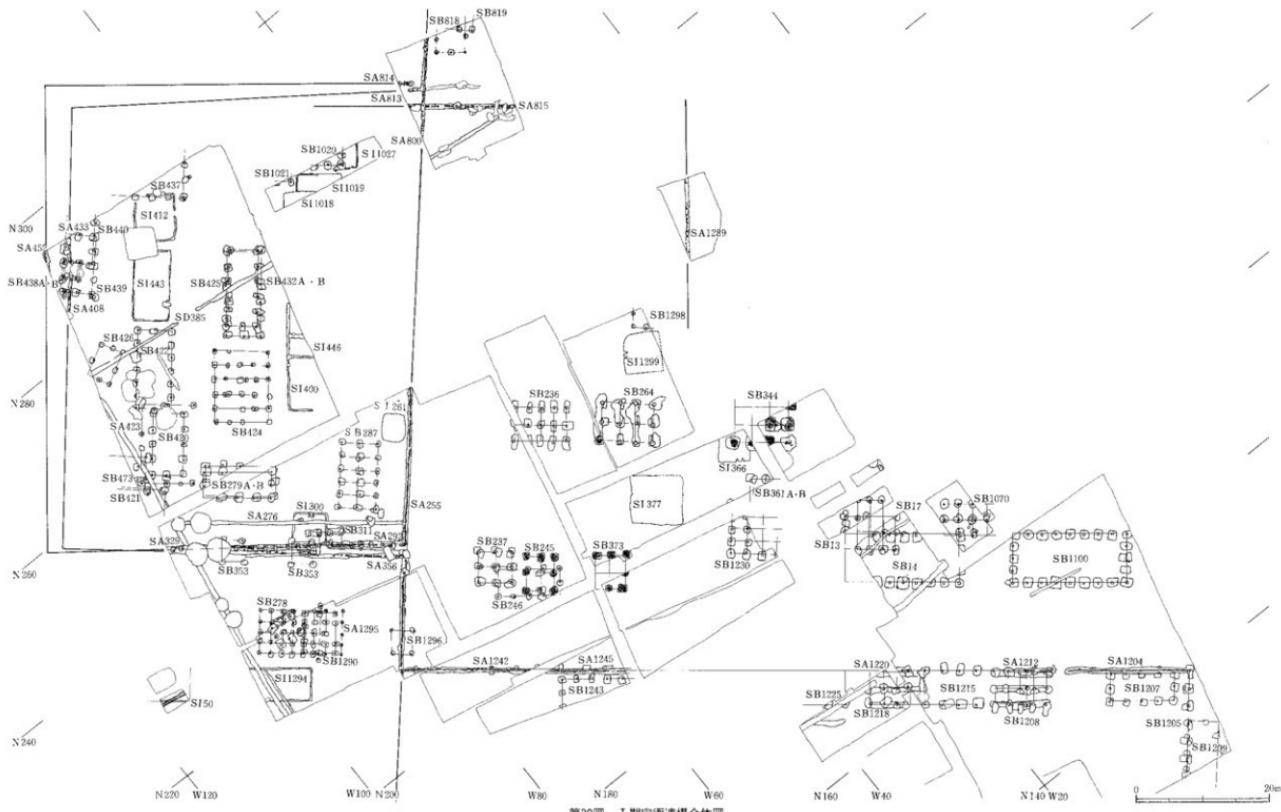
第87次調査で発見されたSB264はその西側に位置するSB236とほぼ同規模で並立しており、さらに東側に位置するSB344とも一列を成し、3棟の倉庫建物が軒を揃えて建つことが確認された。SB236との間隔は4.8m(16尺)、SB344との間隔は12m(40尺)である。

第86・87次調査で、I期官衙あるいはそれ以前と考えられる遺構から出土した土師器は、官衙の造営・存続期と考えられる7～8世紀の在地の土師器にはこれまで殆ど認められない特徴を持っているものである。小破片が殆どで、全てを網羅的に集約できないが、大別すれば次の特徴が抽出されよう。1. 全てに共通する点は(1)胎土が橙色系で粒子が密である。(2)胎土に赤褐色粒子を含む。(3)いわゆる内面黒色処理を施さない。2. 器形からみれば(1)口縁部と底部の境に強い段を持つもの。(2)口縁部と底部の境に稜を持つもの。(3)丸底から口縁部へ緩やかに立ち上がるるもの。3. 調整技法からみれば、外面はヨコナデ・ヘラケズリを行ない(1)内面ナデ調整のもの。(2)外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキのもの。(3)内面ナデ調整後ヘラミガキのもの。4. その他色調からみれば、(1)無処理のもの。(2)暗赤褐色を呈するもの。(3)黒色の樹脂状塗布がみられるもの。等がある。

これらの特徴を持ち土師器は、7世紀の在地の土器群とは明らかに異なっていたことから在地外土器との比較検討を行ったところ、鬼高式後葉の土器との類似性が見られたことから「鬼高系」と考えられた(註21)。しかし、これを6世紀代の在地の土器との比較検討により、東北南半の土師器編年第IV型式(住社式)の土師器環との類似性が指摘され、6世紀代の在地の土器とする見方も提示されている(註22)。これら土器群の出自・年代等については、I期官衙の開始年代及びI期官衙以前の第2段階遺構群の年代と併せ、今後の検討課題としておきたい。

## 2. II期官衙の調査

第86次調査で小規模な建物が1棟発見されたのみで、II期官衙段階の遺構は殆ど見るべき物がなかった。今年度の調査区を含む、政府推定域の北側、南辺から北三町位置の東西塚跡までの間に緊密住居跡・緊密建物が散見される程度で、官衙の重要な施設はなかったものとみられる。



第30図 I期宮御造模全体図

## 註・参考文献

度々、引用される郡山遺跡調査報告については次のとおりである。

「郡山報Ⅰ」	仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」「郡山遺跡発掘調査概報」1980
「郡山Ⅰ」	〃 第29集「郡山遺跡Ⅰ」1981
「郡山Ⅱ」	〃 第42集「郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急調査」1982
「郡山Ⅲ」	〃 第46集「郡山遺跡Ⅲ」1983
「郡山Ⅳ」	〃 第64集「郡山遺跡Ⅳ」1984
「郡山Ⅴ」	〃 第74集「郡山遺跡Ⅴ」1985
「郡山Ⅵ」	〃 第86集「郡山遺跡Ⅵ」1986
「郡山Ⅶ」	〃 第96集「郡山遺跡Ⅶ」1987
「郡山Ⅷ」	〃 第110集「郡山遺跡Ⅷ」1988
「郡山Ⅸ」	〃 第124集「郡山遺跡Ⅸ」1989
「郡山Ⅹ」	〃 第133集「郡山遺跡Ⅹ」1990

註1 「郡山Ⅶ」IX章1 (P.77)

註2 伊藤延男「古建築のみかた」(P.125~146) 1967 第一法規出版

鶴垣栄二編 №81「古代の神社建築」「日本の美術2」1973 至文堂

註3 「郡山Ⅰ」IV章3 (P.16)

註4 「郡山Ⅲ」IV章 (P.9~53) SB302 についてはP.15 および第8図 (P.16)

註5 「郡山Ⅳ」III章 (P.7~56) SD273 についてはP.24・56

註6 「郡山Ⅲ」IV章3 (P.38・39)

註7 清水遺跡第III群土器については、多賀城跡調査研究所の丹羽茂氏に実見させていただくとともに、文献や貴重なご教示もいただいた。また、東北歴史資料館の加藤道男氏には有義なご教示をいただいた。記して感謝したい。

註8 丹羽 茂氏「清水遺跡」宮城県文化財調査報告書第77集『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』P.3~540 第III群土器については、IV章のP.306~314 1981

註9 加藤道男「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢II』1989

註10 志間泰治「宮城県角田市住社発見の堅穴住居跡とその考察」『考古学雑誌』第43巻第4号 1958

註11 多賀城関連遺跡発掘調査報告書第11冊「名生郷遺跡VI」宮城県多賀城調査研究所 1986

註12 住社遺跡出土土器については志間泰治氏の御好意により実見させていただいた。また、宮城県教育委員会文化財保護課の真山悟氏、岩見和泰氏には貴重な御教示をいただいた。記して感謝したい。

註13 仙台市文化財調査報告書第43集「栗遺跡」1982

註14 氏家和典「陸奥國分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論集』1967

註15 仙台市文化財調査報告書第98集「宮沢遺跡－第15次発掘調査報告書」1987

註16 仙台市文化財調査報告書第34集「六反田遺跡発掘調査報告書」1981

註17 「郡山遺跡第65・86・87次調査現地説明会資料」 1990.9

「第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料－郡山遺跡－」1991.2

註18 「郡山Ⅸ」V章4 (P.33~40) 第3段階1期官衙の占い順からA・B・Cの3小期にわたって変遷するものとみた。A期は倉庫群が建つ時期、B・C期は板塀が造られる時期である。

註19 「郡山Ⅵ」VII章4 (P.64) それまで堅穴住居跡としてきたもののうち、明らかに官衙を構成する建物で、長屋状を呈する堅穴造構について「堅穴建物跡」と呼称することとした。

註20 「郡山Ⅳ」III章4 (P.52)

註21 註20と同 III章4 (P.53)

註22 註8と同

## 調査成果の普及と関連活動

### 1. 広報・普及・協力活動

月日	行 事 名 称	担当職員	主 催
5.12～13	第56回総会研究発表	木 村	日本考古学協会
8.24～26	第18回サマーセミナー発表	木 村	古代史サマーセミナー
8.29	見 学 研 修	木 村	国学院大学古代史研究室
9.6	第65・86・87次調査報道発表	佐藤(隆)他	
9.8	〃 現地説明会	早 板 他	
12.8～9	宮城県内発掘調査成果発表会	長 島	宮城県教育委員会
第13回文化財展「名取川と遺跡」	11月30日～12月5日		フジサキデパート
仙台市博物館 常設展「原始・古代・中世」			
八本松市民センター 「郡山遺跡資料展示」			
山田市民センター 「郡山遺跡資料展示」			

### 2. 共 催 事 業

「第17回古代城柵官衙遺跡検討会」

期 日 2月9日(土)～10日(日)

会 場 仙台市科学館

参加者数 305名

内 容 平成2年度に実施された城柵官衙遺跡21件の発表(資料発表6件)をスライド映写を中心に行った。また特集「郡山遺跡をめぐる諸問題—陸奥国初期官衙の成立—」では基調報告5件の発表後、1時間40分の全体討論を行った。

### 3. 調査成果執筆

『日本考古学年報42 1989年度版』「宮城県郡山遺跡」 木村

### 4. 調査指導委員会の開催

第18回 郡山遺跡調査指導委員会 9月6日 東二番丁分庁舎7F会議室

○平成元年度の事業報告について

○第3次5ヶ年計画および平成2年度調査について

写 真 図 版



図版1 郡山遺跡航空写真

図版2 第86次調査区  
全景（西より）



図版3 第86次調査区  
全景（東より）



図版 4 第86次調査区  
西側全景(東より)



図版 5 第86次調査区  
全景 (西より)



図版 6 第86次調査区  
建物群 (東より)





図版 7 第86次調査区  
S I 1294・建物群  
(西より)

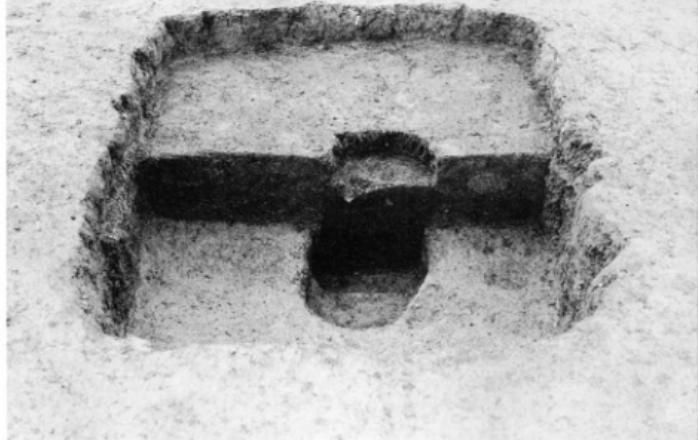


図版 8 第86次調査区  
S I 1294・建物群  
(南より)

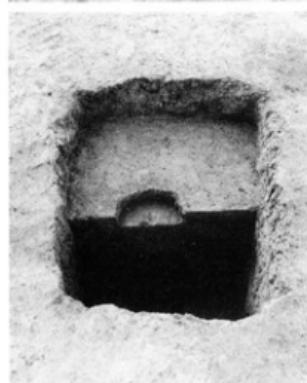
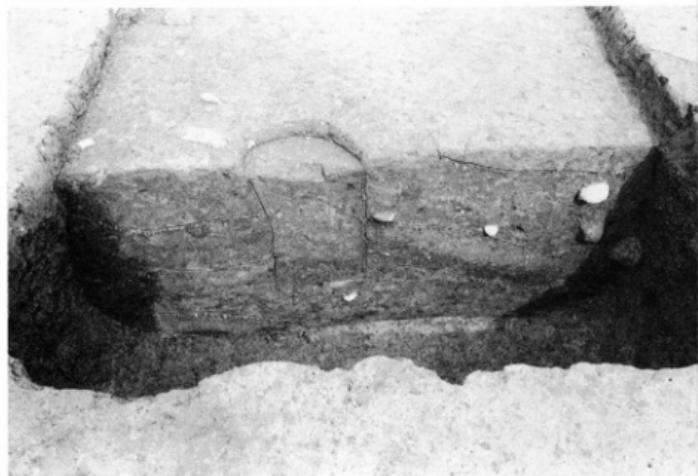


図版 9 第86次調査区  
S I 1294・建物群  
(北より)

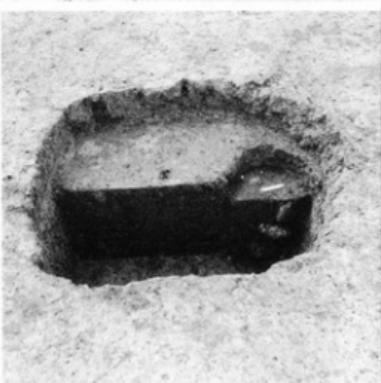
図版10 第86次調査区  
S B278南1西3  
柱穴土層断面  
(南より)



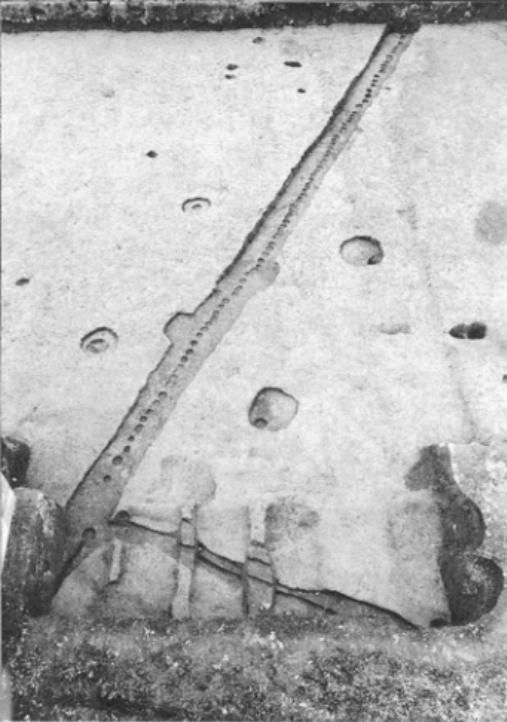
図版11 第86次調査区  
S B302南1東1  
柱穴土層断面  
(南より)



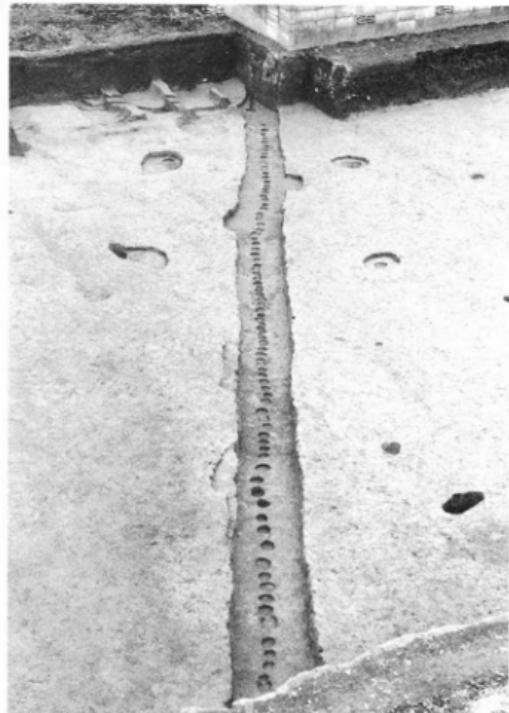
図版12 第86次調査区 S B1290  
南1東1柱穴土層断面(南より)



図版13 第86次調査区 S B1290  
南棟持柱土層断面(東より)



図版14 第86次調査区  
S A255・S A1242  
(南より)

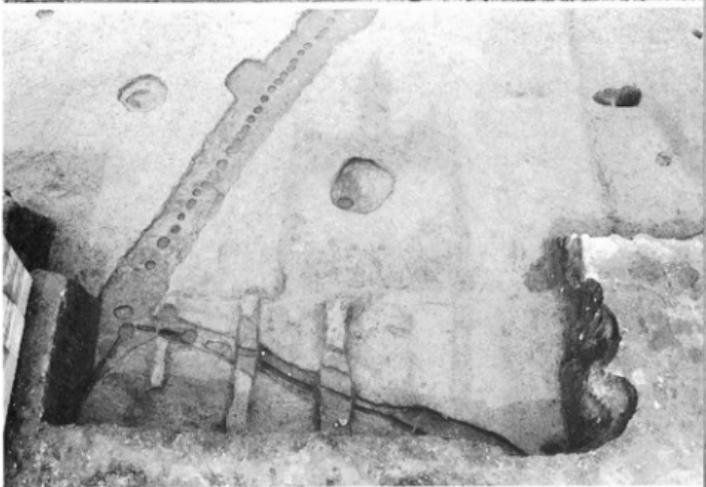


図版15 第86次調査区  
S A255材木列  
(北東より)

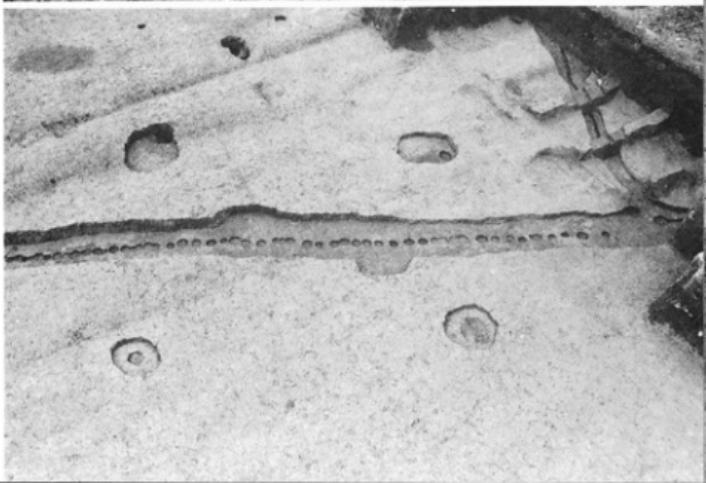
図版16 第86次調査区  
S A255材木列  
(北東より)



図版17 第86次調査区  
S A255・S A1242  
接続部 (南より)



図版18 第86次調査区  
S B1296 (西より)

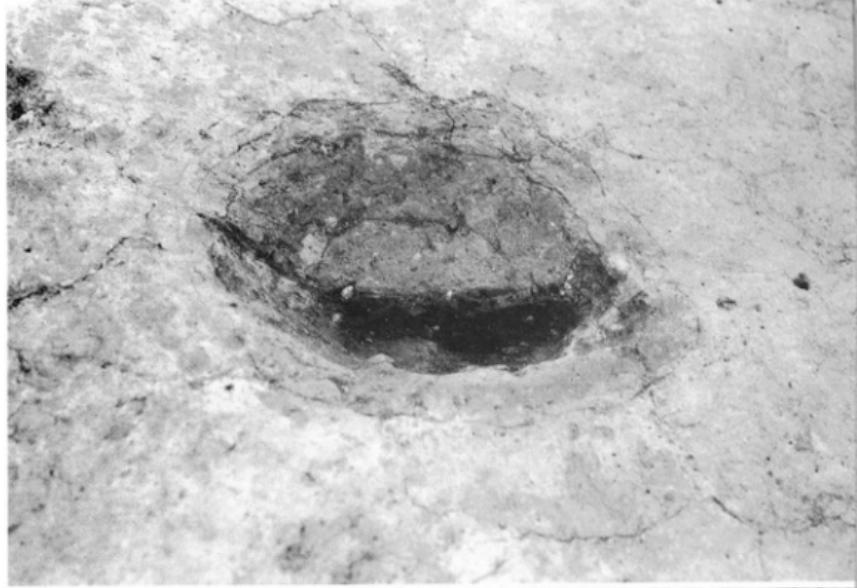


図版19 第86次調査区  
S I 1294完掘全景  
(西より)



図版20 第86次調査区  
S I 1294(北より)





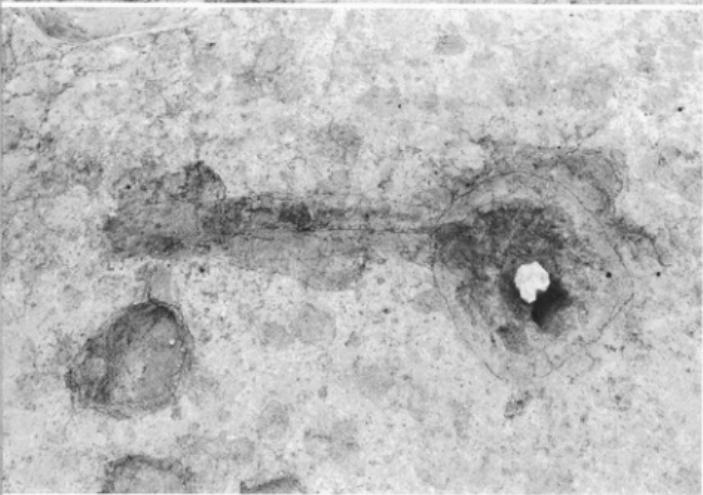
図版21 第86次調査区  
S I 1294 1号炉土層断面  
(東より)



図版22 第86次調査区  
S I 1294 1号炉窓穴全景  
(南より)



図版23 第86次調査区  
S I 1294 2号炉  
土層断面  
(南より)



図版24 第86次調査区  
S I 1294 2号炉  
完掘全景  
(南より)

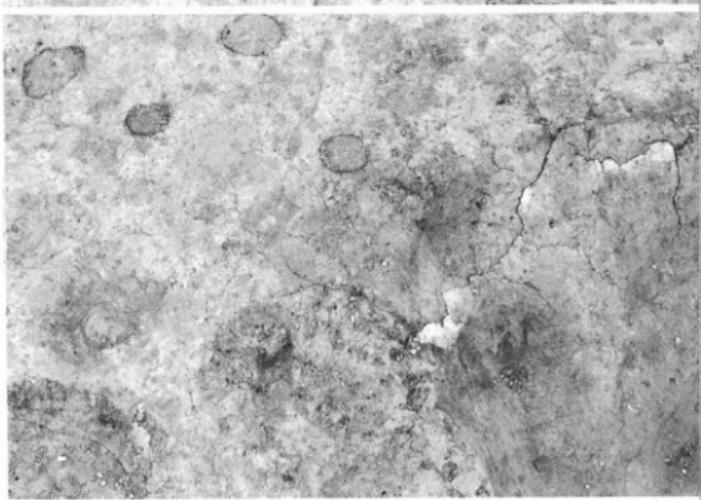


図版25 第86次調査区  
S I 1294 3号炉  
土層断面 (西より)

図版26 第86次調査区  
S I 1294 3号炉  
完掘全景(南より)

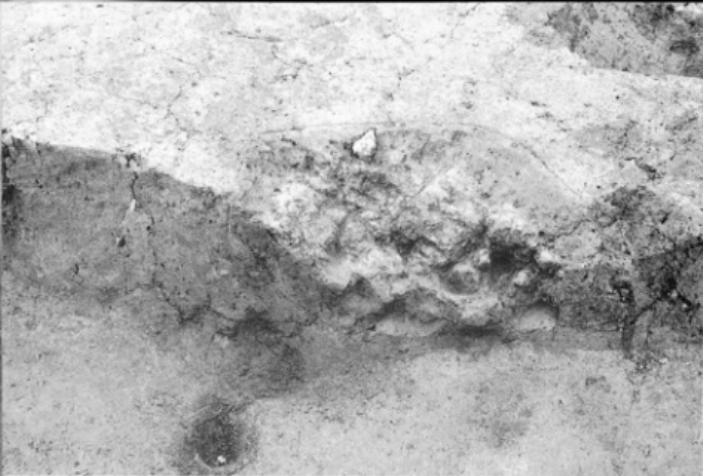


図版27 第86次調査区  
S I 1294 4号炉  
完掘全景(北より)

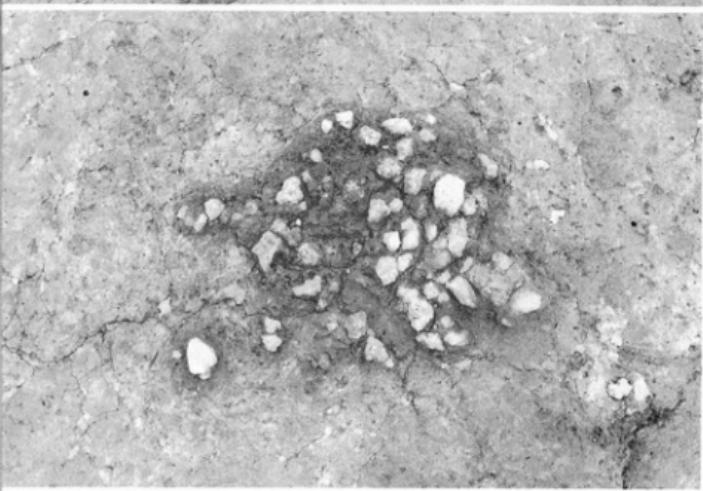


図版28 第86次調査区  
S I 1294 6号炉  
土層断面(西より)





図版29 第86次調査区  
S I 1294 6号炉  
完掘全景(西より)



図版30 第86次調査区  
S I 1294 5号鉄滓  
(北より)



図版31 第86次調査区  
S I 1294出土鉄鎌  
(東より)

版32 第86次調査区  
SK1293完掘  
全景(南より)

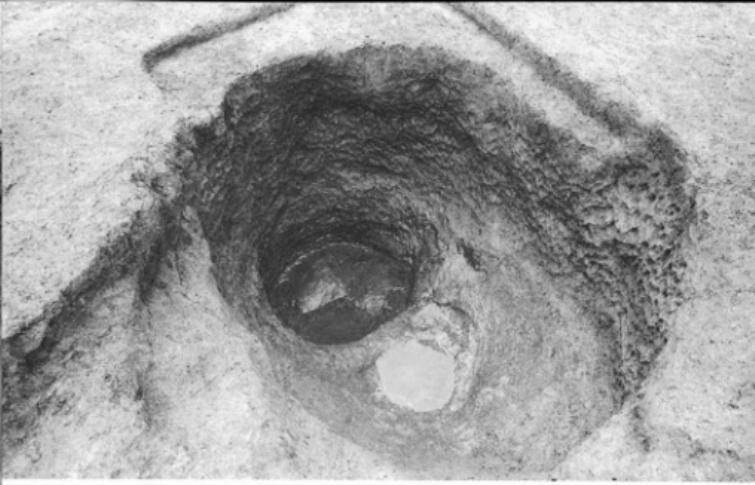


版33 第87次調査区  
全景(北より)



版34 第87次調査区  
SB264全景  
(南西より)

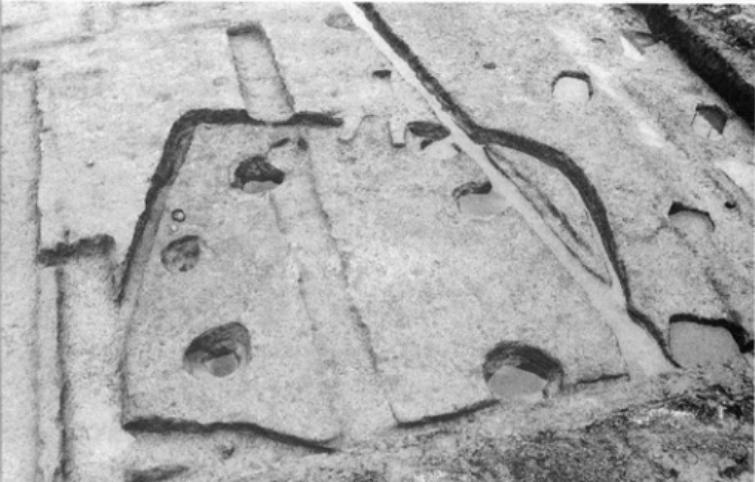




図版35 第87次調査区  
S B264 P 3  
抜き取り穴⑦  
(南西より)



図版36 第87次調査区  
S B264 P 12  
抜き取り穴⑧  
(東より)



図版37 第87次調査区  
S I 1299 全景  
(東より)

図版38 第87次調査区  
S I 1299  
遺物出土状況  
(北より)

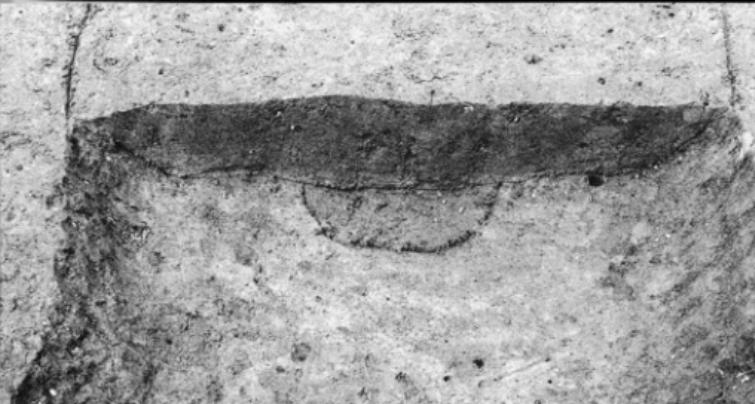


図版39 第88次調査区  
Ⅱ層上面  
(北より)

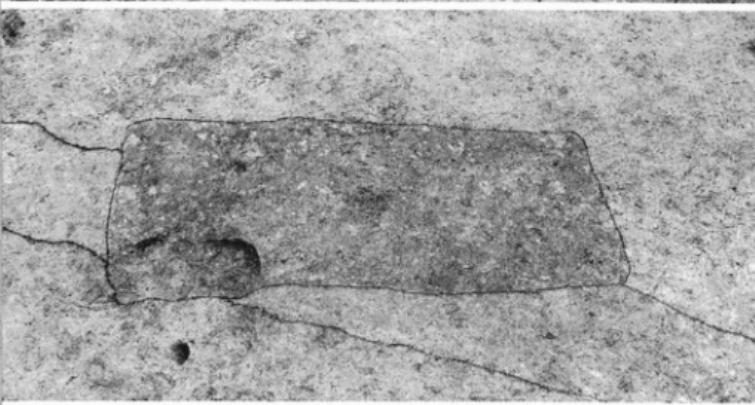


図版40 第88次調査区  
全景(北より)

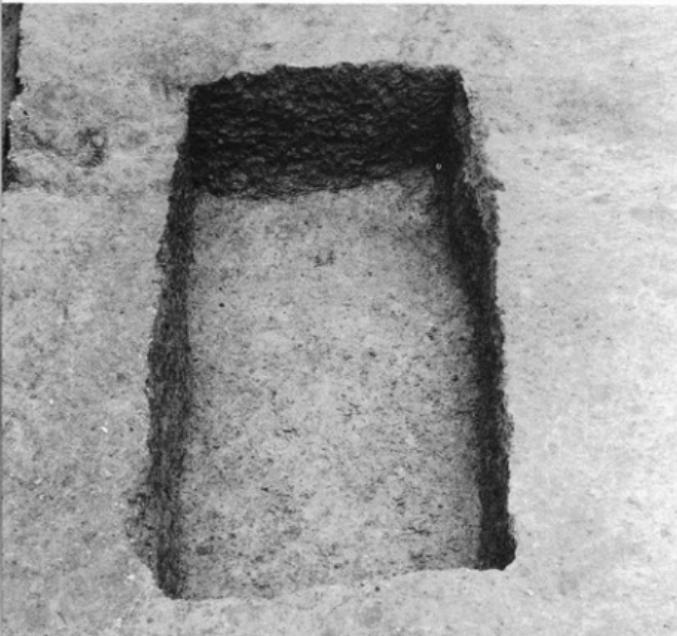




図版41 第88次調査区  
S A1289  
土層断面  
(南より)

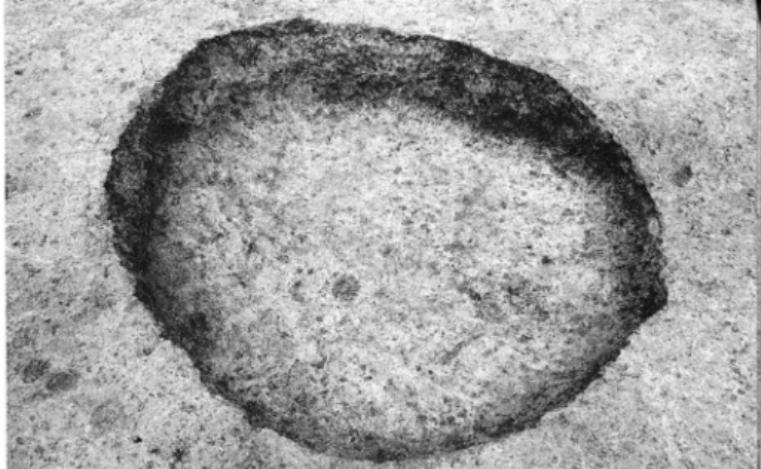


図版42 第88次調査区  
S K1284  
検出状況  
(西より)

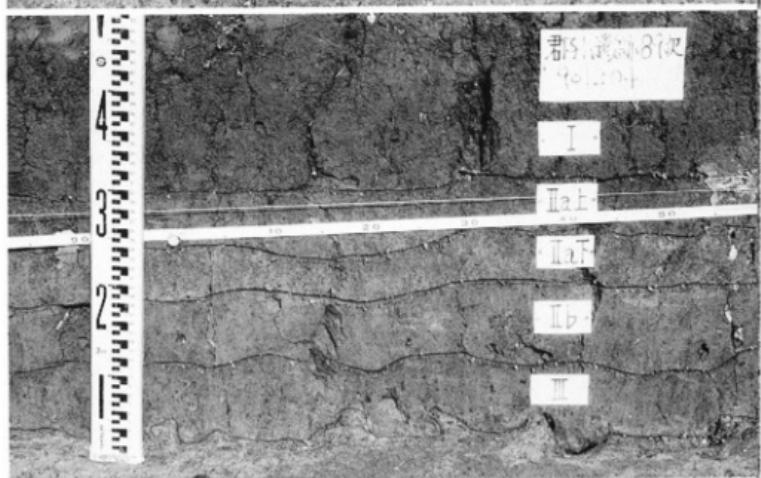


図版43 第88次調査区  
S K1284全景  
(南より)

図版44 第88次調査区  
SK1286全景  
(東より)



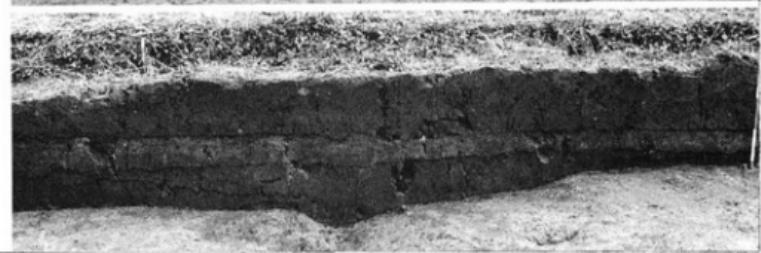
図版45  
第86次調査区北壁  
プラント・オバール  
サンプル土層断面  
(南より)

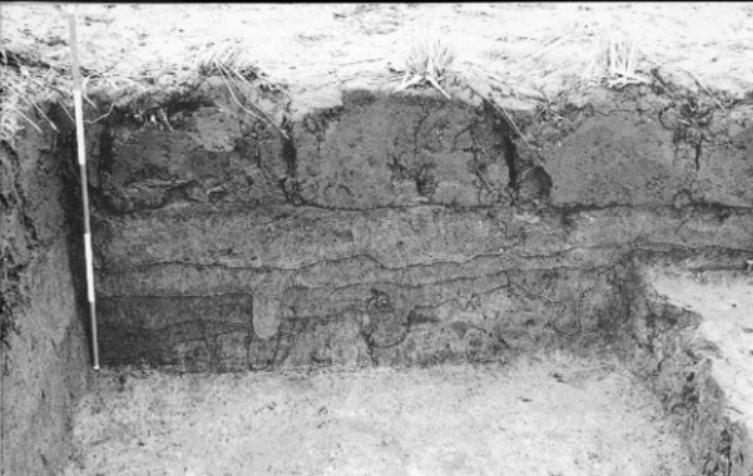


図版46 第89次調査区  
北壁畦畔  
土層断面  
(南より)



図版47  
第89次調査区東壁  
北端土層断面  
(西より)





図版48 第89次調査区  
北区西壁南端  
土層断面  
(東から)



図版49 第89次調査区  
Ⅲ層上面畦畔  
完掘(西より)

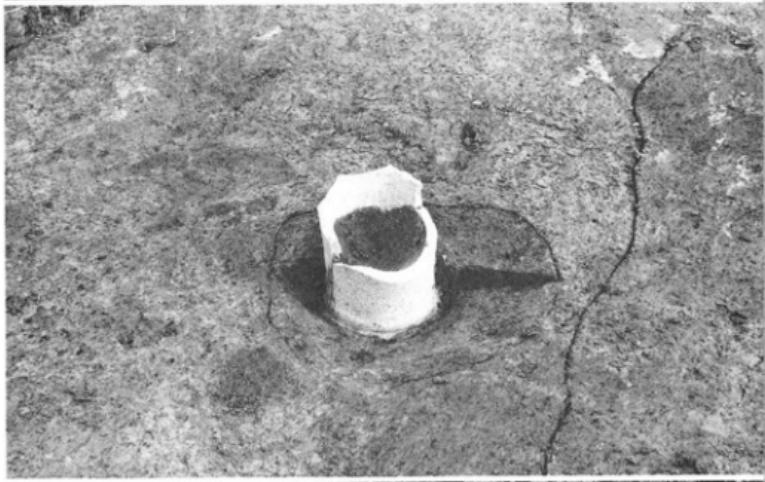


図版50 第89次調査区  
上面遺構検出  
(東より)

版51 第89次調査区IV層  
上面遺構検出状況  
(南より)

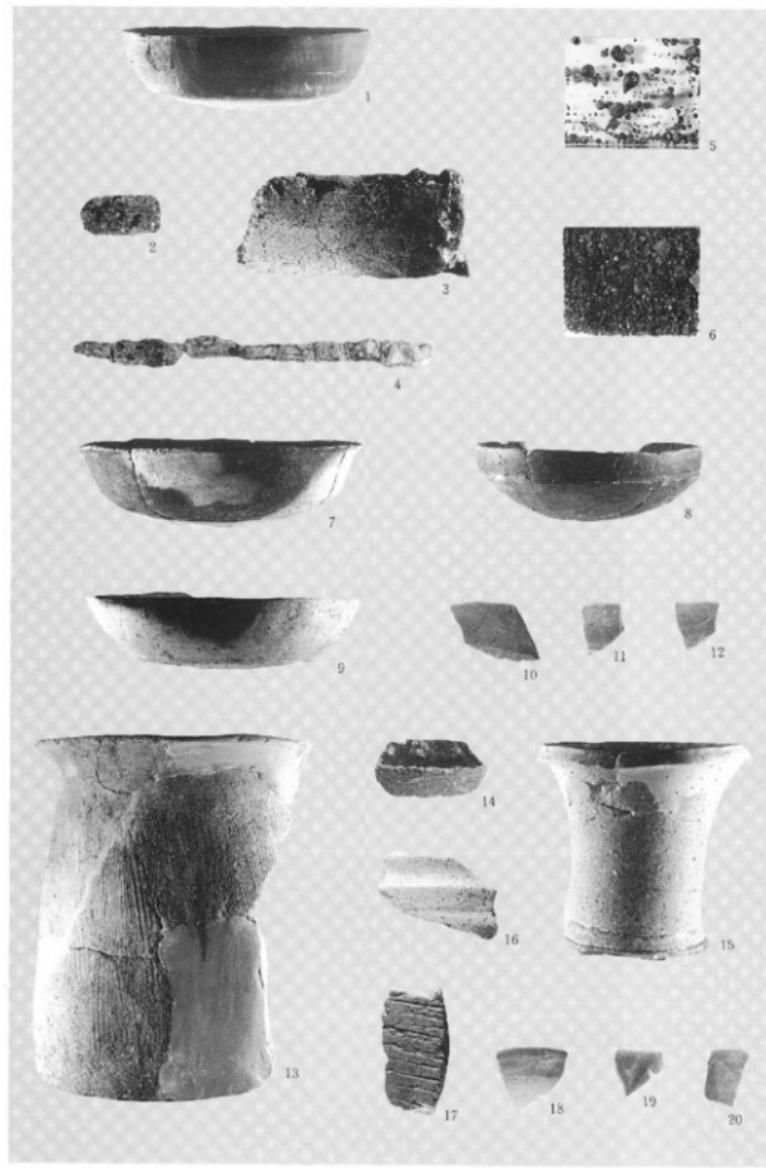


図版52 第89次調査区  
須恵器出土状況  
(西より)



図版53 現地説明会





1. 土師器環 C-656      6. 鋼造刺片  
 2. 鉄 製品 N-44      7. 土師器環 C-669      11. 土師器環 C-672      16. 円筒埴輪 P-21  
 3. フイゴ羽口 P-19      8. 土師器環 C-670      12. 土師器環 C-673      17. 石 白 K-27  
 4. 鉄 銅 N-49      9. 土師器環 C-674      13. 土師器環 C-681      18. 墓器 盒 I-29  
 5. 粒 状 洞      10. 土師器環 C-671      14. 須恵器壺 E-320      19. 墓器 瓶 J-9  
 15. 須恵器壺 E-324      20. 墓器 瓶 J-8

## 文化財課職員録

課長 早坂春一

管理係		調査第一係			
係長	鶴田義幸	係長	佐藤 隆	教諭	佐藤好一
主事	白幡靖子	主任	田中則和	主事	佐藤 洋
〃	佐藤良文	教諭	太田昭夫	〃	金森安孝
〃	高橋三也	主任	篠原信彦	教諭	小川淳一
〃	庄司 厚	〃	木村浩二	主事	渡部弘美
		主事	吉岡恭平	〃	工藤哲司
		〃	斎野裕彦	〃	主浜光朗
		教諭	五十嵐康洋	〃	長島榮一
		〃	渡辺雄二	〃	工藤信一郎
		主事	大江美智代	〃	荒井 格
				〃	中富 洋
		調査第二係			
係長	加藤正範	教諭	高倉祐一		
主任	熊谷幹男	主事	佐藤 淳		
		〃	渡部 紀		

### 「郡山遺跡」発掘調査報告書刊行目録

- 第23集 年報1－昭和54年度発掘調査略報－(昭和55年3月)
- 第29集 郡山遺跡I－昭和55年度発掘調査概報－(昭和56年3月)
- 第38集 郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査概報－(昭和57年3月)
- 第42集 郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急調査－(昭和57年3月)
- 第46集 郡山遺跡III－昭和57年度発掘調査概報－(昭和58年3月)
- 第64集 郡山遺跡IV－昭和58年度発掘調査概報－(昭和59年3月)
- 第74集 郡山遺跡V－昭和59年度発掘調査概報－(昭和60年3月)
- 第86集 郡山遺跡VI－昭和60年度発掘調査概報－(昭和61年3月)
- 第96集 郡山遺跡VII－昭和61年度発掘調査概報－(昭和62年3月)
- 第110集 郡山遺跡VIII－昭和62年度発掘調査概報－(昭和63年3月)
- 第124集 郡山遺跡IX－昭和63年度発掘調査概報－(平成元年3月)
- 第133集 郡山遺跡X－平成元年度発掘調査概報－(平成2年3月)
- 第146集 郡山遺跡XI－平成2年度発掘調査概報－(平成3年3月)

---

仙台市文化財調査報告書第146集

平成2年度

郡山遺跡 XI

— 平成2年度発掘調査概報 —

平成3年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

印刷 総東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

---

